SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# 柳田国男の第一次世界大戦後：雑誌『民族』の可能性と挫折



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 静岡大学学術院教育学領域<br>公開日: 2024-12-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 矢野, 敬一<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.14945/0002001102 |

# 柳田国男の第一次世界大戦後

## －雑誌『民族』の可能性と挫折－

Yanagita Kunio's Post-World War I Experience
The Possibility and Setbacks of the Magazine *Minzoku*

矢野　敬一[1]
YANO Keiichi

（令和 6 年 11 月 29 日受理）

### １．はじめに　第一次大戦後という時代の中で

大正半ばから後半にかけての柳田国男の軌跡をたどると、その対外的な所属先にとかく目が行きがちとなる。大正八（一九一九）年に貴族院書記官長を辞任するや、翌年には東京朝日新聞社客員として迎えられる。その後、国内の旅を重ねる間もなく、大正一〇（一九二一）年には国際連盟の常設委任統治委員会の委員としてジュネーブへ赴任。二年後にはその職を辞し、朝日新聞社の編集局顧問論説担当に。仕事の上で目まぐるしく官と民を行き来していたのが、当時の柳田だったのだ。

その動きが落ち着くのが、ジュネーブからの帰任以降となる。以後、ジャーナリストとして朝日新聞紙上にいくつもの論説を掲載し、かつ多くの講演をこなして発言し続けたのがこの時期の柳田だ。それゆえ当時の柳田については近年、普通選挙の実施と公民育成［大塚　2014、鶴見 2019］、あるいは選挙粛清運動との関わり［室井 2010］という側面に焦点が当てられてきた。実際、当時の柳田は普通選挙実施、そして公民教育の重要性を事あるごとに唱えていたのも、確かだ。

たとえば大正一四（一九一五）年、柳田は講演の場でこのように話しているのである。

> （普通選挙が実施されて・引用者）自由な投票をさせやうといふ時代に入ると、始めて国民の盲動といふことが非常に怖ろしいものになつて来る。公民教育といふ語が今頃漸く唱へられるのもをかしいが、説かなければわからぬ人だけに対しては、一日も早く此国此時代、此生活の現在と近い未来とを学び知らしめる必要がある［柳田 1998 13］。

とはいえ、普通選挙実現に向けて声を上げていたのは柳田、あるいは朝日新聞社関係者に限られていたわけではない。普通選挙実現も含めて当時の大正デモクラシーの大きな潮流の中に、柳田も生きていたのである。その根底にあったのは、第一次大戦という経験であった。

大正七（一九一八）年にドイツが降伏後、翌年パリ講和会議が開催。そこで主導機関となったのがイギリス、アメリカ、フランス、イタリア、日本から構成された五大国会議で、国際連

---

[1] 社会科教育系列

盟設立を正式に議論することが決められた。ここに日本があるのは、国際連盟を世界的な組織とするために地理的配分からアジアの代表として大国に入れる、という地理的バランスを踏まえた配慮からだった。その後国際連盟が成立すると、日本は常任理事国の一翼を担っていく［篠原 2010 37・64］。

そうした情勢は、多くの人々に「世界の大勢」と関連付けて日本の現状をとらえる見方へと促す。有馬学は、普選を強く推す当時の一衆議院議員の言葉「世界の大勢既に斯の如く、而して世界列強の中に今や普通選挙制ならざる邦は、独り我が邦のみと言うも過言ではない」という一節を引く。そして普通選挙について、「世界の大勢」しかも世界列強のそれを準拠枠とする語り口をそこに見出す。当時多く見られたこうした語り口から、普通選挙はまさしく世界大戦の産物であり、戦後ナショナリズムの表現形式だったと有馬は位置づける［有馬 2013 180］。

そう、柳田はこうした言説空間の中で普通選挙推進や公民教育実現に向けて論陣を張っていたのであり、その意味で柳田の論議は同時代にあって特に目を引くようなものではなかった。だが、他方で柳田が第一次大戦後にあって独自のポジションにあったことも見落としてはなるまい。それは国際連盟の委任統治委員会の委員を務めた、という点である。

委任統治とは第一次世界大戦敗戦国の旧植民地で独立が時期尚早な地域に対して、国際連盟加盟の戦勝国が統治する制度のことである。日本が委任統治することになったのは、赤道以北旧ドイツ領ミクロネシア。委任統治委員としての柳田は、こうした太平洋上の島々が置かれていた状況に嫌でも目を向けざるを得なかった。柳田の関心はそれまで抱いていた沖縄諸島から、さらに南方に広がる太平洋上の島々にも及んでいく。学問上の問題関心は、おのずと広がらざるを得ない。第一次大戦後の状況は、柳田の学問をどのように方向づけたのか、という点が本稿の問題関心となる。

やや唐突かもしれないが、大正期後半から昭和初期の柳田の営みを概括した岡村民夫の次の言葉をここで引用しておく。

> 渡欧から一国民俗学にいたる柳田の社会活動と学問形成は、世界史的に見れば、第一次世界大戦後の新世界秩序の中で演じられた、民族自決主義をめぐる無数の思想的ドラマの一ケースともいえるだろう［岡村 2013 355］。

そう、そうなのだ。岡村の言葉はまさにこの時期の柳田の軌跡を端的に言い当てている。本稿は岡村の言葉に導かれながら、その学知をめぐる紆余曲折をたどることを目指す。雑誌『郷土研究』を刊行していた時期の柳田について、そこにかかわる人々の学歴に着目した拙稿を先に上梓した［矢野 2023］。本稿でも同様に「学歴」が焦点の一つとなる。

そのうえで、今一つ、当時の柳田についてみるうえで欠かせない点を挙げておきたい。それは柳田が抱いていた自身の心身への不安であり、自らの学を継承してくれるはずの「青年」への期待、である。たとえば昭和一六（一九四一）年に朝日文化賞を受賞した折の「民俗学の三十年」と題されたスピーチから見てみよう。

> 私は齢四十に近くなつてから、発心入道した所謂晩出家でありまして、おまけに虚弱であつて、今頃まで達者で居られるといふ自信がもてませんかつた為に、最初から跡継ぎのことを考へて居りました。それには自分がこの学問に心を傾けた動機、それよりも一層具体的に、特に興味を引付けられた問題を、説き立て書き立てゝ若い人たちの参加を誘ふがよいと考へまして、先づ盛んにそれを試みました［柳田 1999b 126］。

私たちは敗戦を間近にして「いよいよ働かねばならぬ世になりぬ」と意気込む七〇歳の柳田、

そして多くの弟子に囲まれて米寿の祝いを受けた柳田を知っている。だが、本人からすればそうした人生の軌跡は全て結果に過ぎず、自らは知るよしもなかった。早くから「虚弱」だと自覚していた柳田は、五〇歳前後になると自らの「老い」を強く意識するようになる。それは他方でより若い「青年」への期待へとつながり、大正一四（一九二五）年に創刊した雑誌『民族』では岡正雄、有賀喜左衛門他のまだ大学を卒業して程ない若手を編集役に起用していく。自らの老いの自覚と青年への期待は、この時期の柳田の学問の方向性を押さえるうえで欠かせない点だ。

## ２．ジュネーブでの「留学体験」と民族学

### 2.1 「老い」の自覚と「青年」への期待

大正一〇（一九二一）年五月九日、国際連盟の委任統治委員会委員としてこの年四六歳を迎える柳田は横浜から春洋丸に乗船し、まずアメリカに向かう。その経緯を『柳田國男全集』の年譜から概略、拾い上げていこう［小田 2019］（なお、以下、柳田の動向については小田の年譜による）。

委任統治委員会の日程自体は、ごく限られたものだった。大正一〇（一九二一）年でいえば、一〇月四日から九日まで、翌一一年では八月一日から一一日まで、一二年では七月二〇日から八月一〇日までの間で、いずれも一か月にも満たない。途中一度の帰国を挟んだ二年半ほどの渡欧体験は、柳田にとって最初で最後、生涯で一度のものとなった。本務に拘束されている時間が限られていた分、柳田はそれ以外の時間を博物館や美術館の訪問、あるいは大学の講義の聴講や数多くの洋書の購入にあてることができた。この点については後述しよう。

ジュネーブ滞在時、四〇代後半を迎えていた柳田は、他方で老いの自覚を強めていく。柳田の佐々木喜善宛書簡（大正一二年三月一七日付）には、そうした思いの萌芽が見て取れる。ジュネーブで同じ宿に宿泊していたパリの老人がこの四年間で老いが大変進んだと書いた後、「私も静にしてゐるとじりじり、年をとるのがわかるやうにも感じ早く還つて今少し働きたくてたまらない」［柳田 1971a 478］というのだ。

こうした思いはジュネーブからの帰任後も、つづられていく。同じく佐々木宛の昭和二（一九二七）年八月二四日付書簡では「自分ハ眼が少しよわり小字の本を見ること難儀に相成候　原稿も非常に大きな字をかき申候」［柳田 1971a 488］と、老眼の悩みを伝える。身体面での老いも如実に実感するようになったのだ。さらに成城に新居を構えて程ない同年一〇月一七日付の胡桃沢勘内宛書簡では、「昨月初より此処に引きうつり始めて十分の野外秋色を味ひ候と共に始めて是が老境と申ものなることを意識いたし候」［柳田 1971b　527］と書く。老いの自覚がここでは「老境」と、より強く表現されているのが見て取れる。その時点で柳田はまだ五〇歳を過ぎてさして経ってはいない。現在ならば、「人生百年時代」のまだ折り返し地点である。

戦後も『先祖の話』『海上の道』といった著作を出し続け、八七歳で天寿を全うした柳田の「その後」を知る者にとっては、柳田の感慨はいかにも早すぎるように思われる。だが、当時の状況を振り返ると、そうではないことがわかる。『府県別生命表集』には、五年単位で年齢とその平均余命が掲載されていて、それによれば昭和元年から五年にかけての東京都の五二歳男性の平均余命は一五・五年［水島 1961 28］。五〇歳ともなれば、残りの人生はもう先が見え、六〇代半ばで命を終えるのが平均的だったのだ。実際、柳田の弟の松岡静雄は昭和一一（一九三六）年に五八歳で、松岡映丘は昭和一三（一九三八）年に五六歳で没している。現在のように男性

の平均寿命が八一歳という時代とは、わけが違う。それを踏まえると、五〇歳前後で柳田が抱いた老いの意識は、当時ごく自然なものだっただろう。

老いの自覚は柳田に学問の思いへと強く駆り立てる。戦後の回想記である『故郷七十年』では、大正一二（一九二三）年九月の関東大震災後、日本に帰国するや「ひどく破壊せられている状態をみて、こんなことをしておられないという気持ちになり、早速こちらから運動をおこし、本筋の学問のために起つという決心をした」［柳田 1997a 199］と記す。

とはいえ学問への発起の念は、すでにジュネーブ滞在時から萌していたのは確かである。佐々木喜善宛書簡（大正一一年一二月九日付）には、すでに「フォクロアの学問ほど人間味の豊かな学問は無いと思つてゐます」「フォークローアの学問には日本人に限り特別の使命があるやうに私はおもつてゐます」［柳田 1971a 472,474］とあるのだ。日本人だけの特別な使命という言い回しは、学問への柳田の思いが直截に伝わってきて、熱い。

ジュネーブから帰国するや、柳田はそうした思いとともに、それを分かち合い、さらには継承してもらうべく、自らより若い「青年」に対して事あるごとに呼び掛けていく。講演会はその格好の場となった。昭和三（一九二八）年に刊行された、その名も『青年と学問』は、様々な講演録を集めた一冊である。「青年」と銘打って読者層を想定した題名自体、興味深い。柳田の著作群を俯瞰すると、読者層を念頭に置いた題名は『女性と民間伝承』、『こども風土記』、『村と学童』など、ごく限られているからだ。それだけ当時の柳田にとって「青年」への期待は大きかったということだ。『青年と学問』からは自らの老いの自覚と、他方で青年への期待との双方が読み取れる。たとえば大正一三（一九二四）年の栃木中学校での講演では、こう語りかけている。

> 人の一生は誠に短い。まだ知らねばならぬことが沢山に残つて居るのに、もうからだが弱くなり、且つ用が段々多くなつて此先さう大した成績を挙げる見込みが無くなつた。計画の一部分は是非とも後から来る諸君の中の誰かに、引き継いで置かねばならなくなつた。そこで折もあるならば今日の様な会に出て、大に話して見たいと思つて居たところであつた［柳田 1998 43］。

昭和元（一九二六）年の東京高等師範学校での「島の話」と題された講演でも、同様だ。

> （島の研究について・引用者）少しでも之に貢献しようといふ志を抱いて居たのだが、既に年をとつて之を有為の青年に引き継がねばならぬ必要が、余りにも早く到来した。是が本日出席して諸君に此問題を提供するたつた一つの動機である［柳田 1998 60］。

それ以前に刊行した雑誌『郷土研究』では、各地の読者にその土地土地の事象を投稿するように呼び掛けた。雑誌を読者相互が集う「広場」とし、問題意識を共有することがねらいだ。だが、老いの自覚が強まったこともあるのか、この時期、柳田は講演会という対面の場で、しかも「青年」にターゲットを絞って直接、呼び掛けるようになる。

**2.2 ジュネーブでの「留学体験」**

そもそも柳田はジュネーブで新たな学問への発起になぜ至ったのか。委任統治委員としての職務それ自体は、一般的に言えばそうした発起にはつながりにくいはずだ。改めて柳田にとって、ジュネーブでの体験が担った意義を振り返ろう。

柳田は委任統治委員となるまで渡欧体験はなかった。しかし後年、その受諾の経緯について「西洋も見たかつたのと、仕事が新しくて珍しかつた」［柳田 2004 282］と述べているように、渡欧への思いはかねてから抱いていたのは確かだ。

柳田がいう「西洋を見る」とは、具体的にどのようなことだったのか。佐谷眞木人は、柳田のジュネーブ滞在は同時に「留学」という性格をも帯びていた、という。滞在中、大学の講義を聴講し、西欧の進んだ学問、とりわけエスノロジーの新たな潮流にふれたこと、各国を旅行して大量の研究文献を購入したこと。そうした営みは、ほどんど「留学生」のそれに重なる。渡戸稲造や下村宏、後輩の石黒忠篤等、柳田の周辺にいた高級官僚は、みな若いころに西欧留学を経験している。洋行経験がないことは柳田にとってコンプレックスであったはずだとし、「失われた青春」を取り戻そうという思いが柳田にはあった、と佐谷は指摘する［佐谷 2015 100・135］。そう、確かに佐谷がいうように柳田の滞欧が「留学」としての性格をも帯びていたとするならば、ジュネーブで自ら模索する学問に強く思いを馳せたことも理解できる。

柳田がジュネーブに出発した大正一〇（一九二一）年、文部省が派遣した在外研究員の人数は一七四人。その前後を見ると毎年一三〇名から一六〇名程度となっていて、官費支給滞在期間はおおむね二年である。派遣対象は帝大なら若手助教授クラス、地方大学・旧制高校では教授職が多い。派遣中、どこかに一年以上滞在し帰国時に各地を巡る、あるいは数ヵ国に数ヵ月ずつ滞在するのが一般的だった［加藤 2008 26］。柳田は委任統治委員在任中も、ジュネーブを起点としながらイタリアやフランス、ドイツを巡っているので、そのスタイルは在外研究員の滞在形式とほぼ変わらない。その滞在経験は結果として文部省派遣の留学と、ほぼ同等に近いものとなった。

その「留学」の内実を改めて整理しておこう。委任統治委員会の開催日程自体は、年間一か月にも満たないごく限られたものだったので、それ以外のことに多くの時間を割く余裕は十分あった。柳田は様々な体験を通じ、自ら目指す学知を模索していく。

まず、柳田はジュネーブ滞在時に各国の博物館、美術館にこまめに足を運んだ。年譜を参照すると大英博物館、ルーブル美術館、ミラノやフィレンツェの土俗博物館、パパ・ジュリオやラテラノの博物館といった名前が挙がる［小田 2019］。一例として大正一〇（一九二一）年、ドイツのドレスデン民族学博物館で、宝貝を象嵌したアフリカの木像を見た経験を挙げよう。柳田が想起したのは、かつて目にした沖縄の同じく宝貝他のコレクションだった。そこに柳田は民族の移動、文化の伝播を考える手がかりを見出し、後の『海上の道』につながった［岡村 2013 171］。西欧各国の博物館、美術館での見学は、柳田の問題関心をより広げていったのだ。

そうした体験は柳田の読書にも反映されていく。ドレスデンで宝貝に関心を寄せた柳田は、早速イギリスの博物学者ウィルフレッド・ジャクソン著『早期文化の伝播の証拠としての貝類』を読み、その後の南島研究に少なからぬ影響を受けることになる［岡村 2013 176］。柳田が滞欧期間中、日本にいては手にすることができなかった洋書の研究書をむさぼるように買い求めたのも、無理からぬことだったろう。

成城大学柳田文庫にある洋書の所蔵状況を書籍の出版年から区分すると、明治三九（一九〇六）年から昭和五（一九三〇）年にかけてのものが集中し、その後、数は大きく減る。柳田文庫の膨大な洋書の六割以上が、この間に刊行されているという。さらにこの時期は明治四三（一九一〇）年から大正三（一九一四）年までと、大正九（一九二〇）年から大正一三（一九二四）年までの二つのピークが認められる。後者は言うまでもなく、主に滞欧時に入手されたものだ［長谷川 1996 56・57］。洋書の蔵書形成にあたって、この時期の意義はとりわけ大きい。

そこで特徴的なのは、それまでの英語文献に加えてフランス語とイタリア語の専門書が新たに加わったことである。特に一九二〇年代に入ると、フランス語文献が新たな読書対象として

の重みを増していく。読了年がわかっているものでいえば、とりわけ大正一五/昭和元（一九二六）年に集中している。この前後にかけてヴァン・ジェネップやセビオ、またレヴィ・ブリュールの著作、また『社会学年報』に掲載されたデュルケームやモース、ユベール、エルツらのデュルケーム学派の諸論文に柳田は集中的に目を通した［高橋 2000 238～240］。

さらに柳田は滞欧中に何人もの学者に出会い、そして時として大学の講義を聴講する。その一人がジュネーブ大学で人類学を担当したウジェーヌ・ピタールであった。柳田の「瑞西日記」には、大正一一（一九二二）年七月一〇日、九月二四日にその名が見え、特に後者では「ピッタール教授に面会、話をする」という記述がある［柳田 2014 26］。ピタールは人類学に方法論上の応用が可能な学問として言語地理学を学生に紹介しており、柳田はその講義に通いだす。後に柳田が『蝸牛考』をまとめるうえで大きく影響する、その意味で重要な人物である［岡村 2013 209～212］。柳田の年譜には、他にもジュネーブ大学でオルトラマールの比較宗教史を聴講したり、ベルリン滞在時に古本屋でコロンビア大学のフランツ・ボアズに出会い「フォルクスクンデ」と「フェルケルクンデ」の違いを教わる、思わぬ場面もあった。当時の学問の最先端を存分に吸収できたのが、柳田にとっての滞欧の大きな意義だったのだ。それはまさしく「留学」と変わらない体験である。

**2.3 委任統治領の島々と日本との類似性**

柳田はこの時期、民族学関連の著作に多く眼を通している。そうした関心を後押ししたのは、委任統治委員会の委員としての見聞であったことは間違いない。

委任統治とは、第一次世界大戦の敗戦国の旧植民地で独立が時期尚早な地域に対して、かかわりが深い連盟加盟戦勝国が統治権を委任された「受任国」として統治することである。この統治のあり方は、原住民の「福祉と発達」を促進し、民族自決による独立を最終的に目指す点で、従来の植民地化とは異なるとされた［岡村 2013 107］。それは曲がりなりにも民族自決というリベラルな考え方と、帝国主義を和解させる試みとして位置づけられものだ［ドウス 1992 108］。

受任国は毎年、連盟理事会に統治年報を提出することになっており、それを審査し理事会に答申する諮問機関が委任統治委員会である。委員はその国の代表ではなく、あくまでも個人として参加し、国際連盟の精神に則って公平に審査することが求められた。その定員九名の内の一人が柳田だったのだ［岡村 2013 109］。

こうした委任統治のあり方、そしてそこに住まう人々に対して柳田はどのように受け止めたのか。大正一一（一九二二）年の「国際連盟の発達」は、その意味で興味深い。

> 国際連盟の確立に依つて最も恩恵を受けたのは阿弗利加と太平洋の土民だと云ふ説をなす人もあつたが、これは事実である。国際連盟の規定に依る所謂委任統治は土民の幸福安寧を目的として行はれるのである。
>
> 即ち彼等土民に対する文明国の態度が今日になつて始めて確立されたことは驚くべき事実である。（中略・引用者）数年前は人間と猿と間違へた程で、土民は人間としてよりも寧ろ地味や気候と同一視されて来たのである［柳田 2000a 17］。

有馬学はこの一節から、建前とはいえ公然たる植民地主義を不可能としたシステムが、不可視であった「土民」を不承不承ながらも可視的なものにさせた、という。柳田の立場は、国際政治のリアリズムを踏まえつつ、他方で国際連盟の理念をゆるやかにではあるが現実化すべきだとして支持する独特のものだったと有馬は位置づける［有馬 2013 189］。後述するように、

不可視であった「土民」が可視化される際、その可視化に深く与する学知が民族学であり、だからこそ柳田にとって大きな意味を持ちえたのだ。

委任統治領の中でも、柳田がとりわけ関心を寄せたのは日本が受任国となった島々である。それは赤道以北旧ドイツ領の太平洋諸島であり、マリアナ、カロリン、マーシャルの三主要島嶼群からなる、人口約五万二千人（一九二四年調）の地域であった［海野 1972 86］。

そうした島々は柳田にとって、それまで縁遠い存在ではなかった。柳田はジュネーブに赴任する以前から、沖縄に限らずさらに南洋諸島への関心を抱いていたからである。

柳田の弟・松岡静雄とその南洋との関わりについて、岡谷公二の著述から紹介したい。松岡は海軍軍人として第一次大戦に参戦し、ドイツ領ミクロネシアの巡航を経て、ポナペ島を一時、統治。さらに退役後は南洋諸島の研究をし『太平洋民族誌』や『ミクロネシア民族誌』を上梓している。松岡は研究面だけではなく、より実践面での働きかけにも励んだ。その一端が大正七（一九一八）年に公式に発足した日蘭通交調査会の立ち上げである。その会員には柳田はもちろん、新渡戸稲造、石黒忠篤、移川子之蔵、有馬頼寧、白鳥庫吉、新村出といった名前があるが、柳田の尽力によるものであろう。会のねらいはオランダ領インドへの農業移民であり、それを通じて食糧増産と日蘭親善を目指すものだった。しかしそれは当時の南進論とは一線を画していたと、岡谷は注意を促す。

柳田自身、明治末からスキートの『マレーの呪術』や『マレーの俗信』、ウォーレスの『馬来多島海記』等を読み込んでおり、当時の漂白民への関心が海にも注がれる契機となった。さらに移民問題の一環として柳田は南洋諸島に強い関心を抱き、ニューギニア入植への働きかけを各方面に行っている［岡谷 1985 135～153］。入植は結局実現しなかったが、柳田の農政学者としての経世済民的な熱意の発露がここから伝わってこよう。早くから太平洋の島々に関心を寄せていた柳田は、日本の委任統治を契機としてその発言の機会を増し、さらに新たな学知への展望を抱くようになる。

この時期、柳田が思い描く日本の姿は、こうした島々をも視野に入れたものとなる。大正一五（一九二六）年の講演「島の話」から示そう。

> 日本の如く、沢山の島を領土の中に持つて居る国は他には無い。統計年鑑をご覧になればわかるが、周回一里以上及び人の住んで居る島の数が四百以上ある。それへ世界有数の多島海を控へた朝鮮半島を加へ、其上に委任統治領として赤道以北の、俗に謂ふ微小群島を加へたのである［柳田 1998 57］。

柳田が想定した「島」の範囲は日本列島を超えて、さらに広がっていた。それだけではなく委任統治下にある島々に住む人々とは、西欧人と違って日本人はより親密になり得るだろうと柳田は考える。いずれも共に島という地理的条件のもとに暮らす、という点で相通じるからだ、というのだ。

> 我々の同胞が西洋人との間に立てゝ居る精神上の国境がいつになつても中々踏み越えにくいこと、之に反して碌に交通もしなかつた島々の住民が、仮に心置き無く其身の上を語ることが出来たとしたら、すぐにも打解けて互の心持ちを知り、十分な推察と諒解を与へ得られさうだと言ふことである［柳田 1999a 263］。

なぜそうした親近感を抱けるのか。それは島に住むものでなければ味わえない孤独感、またそこで経験してきた特殊な艱難とが今なお共にその性情を支配しているからだ、という。

それだけではない。両者に共通する点が多々あることを、柳田は様々な例を通して提示する。

たとえば大正一三（一九二四）年に『大阪朝日新聞』に寄稿した「太平洋民族の将来」では、日本人の起源を北方に求める説に異を唱え、その根拠としてポリネシア人との共通点を挙げる。ポリネシアには日本の語り部のような存在がいる、米を主食とする、刺青や腰巻をする習俗があるといった点を取り上げ、柳田は「今太平洋民族と日本人の近さを見出さねばならぬ」と説く［柳田 2000b 177］。

それは外面に現れた慣習に止まらない。宗教的な観念にまで及ぶことにも、柳田の視野は届いている。以下、大正一五（一九二六）年の講演「島の話」からの引用。

> 千年二千年の久しきに亘つて、南北太平洋の島々の住民と、最もよく似た環境に包まれて、自然適応の生活を導いて居たものは我々である。故に実際他の大陸居住者の味ひ得なかつた観念、及び是から出たと思はれる信仰の相近いものが至って多い。例へば海と天とを一つに考へようとすること、潮の物を浄める力、ミソギといふものを神聖の方式とすること、風雨雷霆の恐ろしさを、竜蛇鰐鮫の如き水中の大動物と結びつけること、儒艮を人魚と考へたり、海底の歓楽郷を想像したりすることは、をかしな言葉だが日本が本場に近い［柳田 1998 59・60］。

すでに沖縄と本土との共通性に関心を寄せていた柳田は、さらにその範囲を太平洋の島々にも広げて理解しようとする。後に「一国民俗学」として批判されがちな姿勢と、当時の柳田とは一線を画していたことに、ここで目をとめておこう。

**2.4 民族学への期待**

柳田は委任統治のあり方として「我々は世話をして彼らを成長させるのである。彼らの福祉を増進させるやうな統治をする役目を委託されて居るのである」「一にも土人の福祉、二には彼らの発達を目標として統治せねばならぬ」［柳田 2000c 218］と『東京朝日新聞』紙上で訴えかける。ジュネーブからの帰任後、大正一三（一九二四）年の記事だ。それは国際連盟委任統治委員としての体験を踏まえたものだが、他方で太平洋の島々と日本との類似点を柳田が見出したことも大きい。柳田は先の記事で、「我々は国が近く血が近く、古今の境遇に相似たる点の多いことを考へて、公平なる同情者と成りて、彼等の立場から彼等の利益の為に考へて遣らねばならぬことは、何人も否定することは出来ぬ」［柳田 2000c 222］と述べているのは、その証左の一つだ。

では、委任統治下にある人々の福祉を向上させるには、どのようにすればよいのか。先の「島の話」では、統治下にある人々自身が自らの福祉向上のための方法を考え出す見込みが立たなければ、その次の適任者として「自分も亦同じ苦悩を切抜けて、少しは明るい地平線を見付けたる、日本の平民たちで無ければならぬのである」［柳田 1998 60］と、訴えかける。そのためには何が求められるのか。柳田は渡欧時、常設委任統治委員会への報告として英文の「委任統治領における原住民の福祉と発展」を提出している。その末尾で具体的な提案として出されている全七項目では、最後に「民族誌学（引用者注：原文 ethnographical）および言語学的研究に関して採られる段どり」［柳田 1983 231］と締めくくられている。具体的な学知について言及しているのはこの項目だけで、それだけに民族誌学と言語学的研究にかける期待の大きさがうかがえよう。

先に引用した大正一四（一九二五）年の講演「青年と学問」では、メラネシアの社会組織について長期の調査をしたウィリアム・リヴァースを取り上げ、その事業は「正しく其断案に於いて画時代的」だと評価する。「土人の心理と是に基いて発動する社会生活の特色には、従前の

基督教本位の研究から全く立離れて、今一段と根底から考へてかゝらねばならぬものがある。それが斯ういふ新しい学者の力によつて、漸く世に明かになつて来た」とし、その専門とする民族学を評価した。さらに「同時に又我々日本人の自身の歴史を明らかにする為にも、有益なる参考である」［柳田 1998 23］と続ける。西欧社会では「土民は人間としてよりも寧ろ地味や気候と同一視されて来たのである」と鋭く見抜いた柳田は、そうした不可視の存在を可視化する学知のあり方として、民族学に一つの可能性を見出したに違いない。

民族学への期待は翌年の講演「Ethnology とは何か」で、より強く表明された。そこで柳田は「Ethnology が Geography や Topography などと併立して、社会科学の大切な一科目となつたことは、確かに全世界的ともいふべき気運であつた」とする。そのうえで「文明国人」「未開人」いずれも「Culture 文化相の進みにも必ず法則がある。法則があるならばいつかは発見せられずには済まぬ」と、法則性の発見が重要だという。そこで柳田が唱えるのが、かねてから主張してきた「比較」である。「多くの種族の種々の環境に在るものを比較して、甲から乙への推移を辿り、若くは一方の前代記録と、他の一方の現在の状態との間の類似共通を究めること、それが必然的に将来のエスノロジーの中に、包含せらるべき学問といふことになる」［柳田 1998 153］というのだ。

講演では最後に「二十世紀の Ethnology は全く其力によつて面目を一新した。さうして其新しい資料を以て充満する我々の母国を、非常なる人類学の研究所としてくれたのである」と締めくくった［柳田 1998 162］。求めるべき資料は西欧では限られている。千年以上のキリスト教の影響、大規模な民族移動、機械文明の進展によって、多くの資料が失われた。それに対して日本では、状況は全く異なる。一つの家でさえ、現在とともに昔が共棲しているのだ［柳田 1998 26］。西欧社会ではすでに失われた資料が日本ではまだまだ得ることができる、それこそが日本で学問を推し進める強みに他ならないと、柳田は考えた。

同じ大正一五（一九二六）年の講演「日本の民俗学」では、「北でシヤマニスムと称する巫覡管理の霊魂信仰」の広がりを見ると熱帯の島々にも類似するものは多い、しかしその中間の鎖は切れている、という。しかし翻って日本ではそれに類した事例は多く、「比較によつてその歩んで来た途は大凡は知れる。僅かな労力を我々がこの問題の為に費やすならば」「この南北二者の溝渠に橋を架けることも出来るであらう」［柳田 1998 172］と、日本が果たすべき役割を強調する。

シャーマニズムのような国境を越えて展開する事象に対して、日本での事例を通してその位置づけを明らかにする、というだけではない。日本の学問が貢献し得ることを、さらに広げることが可能だと柳田は説く。日本にとって、これほど未開の沃野が広々と残っている学問はないとし、「独り大切なる人間生育の法則発見に付きてのみは、日本が幸ひに一通り片付いたとすれば」、さらにその作業を近隣にまで及ぼすべきだとする。太平洋の島々についていえば、「殊にミクロネシヤの若き弟たち、其又隣のメラネシヤ・パプアの見分け難い沢山の種類が、何れも日本の学問が明るくなるならば、少しは自分たちのどうして貧しく又哀れであるかの、隠れたる原因が知れるであらうかと、待つて居るらしき様子が見える」［柳田 1998 173］のだと、柳田は強調する。

こうした主張から、どこか差別主義的なもの、あるいは植民地主義的感情を見出してはなるまい。当時の柳田は、日本人が他のアジアの人々に対してとる差別的な態度や植民地政策には何よりも批判的だったからである［岡村 2013 230～232］。そうではなく委任統治下にある人々

の福祉を、学問を通してどのように向上させるべきなのかを問う、ジュネーブ時代からの一貫した問題意識をこそ、見て取るべきであろう。民族学こそが、その大役を果たすと柳田は確信していた。

先の講演の末尾をみると、柳田の高揚感がほとばしり出るようである。「その宏大なる道の山口まで、今我々は辿り着いたのである。声高く笑ひ興じつゝこの学問の峠の麓にさしかゝつた処である。別の語でいへば早朝の花やかな欣ばしさである」［柳田 1998 173］と。農政学者としては存分に果たせたとは到底いい難い経世済民の念願が、ここにきて果たしうるだろう、という柳田の楽観と期待とを見て取っても間違いではあるまい。

柳田の思考を辿るとそこには相反する二つのレイヤーから構成されていたと、明快に位置づけたのが大塚英志だ。一つ目は習慣とその連続としての歴史に目を向け、社会政策論、農業政策論に力を入れる「公民の民俗学」。それに対してロマン主義的志向を持ち、異郷や起源への関心から起源論や固有信仰論に引き寄せられる「起源の民俗学」である［大塚 2014 41］。民族学を通して太平洋の島々にいる人々の福祉と発展を目指す方向性は、「公民の民俗学」としてのものだろう。他方、太平洋の島々との慣習や信仰の類似に目を向ける視点は、「起源の民俗学」して位置づけられる。この時期の柳田にとって、この二つのレイヤーは相反するものではなく、互いに重なり合うものとなっていた。それが「声高く笑ひ興じ」「早朝の花やかな欣ばしさ」といった、いつにない晴れ晴れとした物言いにつながったに違いない。柳田の生涯全体を振り返ると、この時期はある意味、奇跡的だったといっていい。

後述するように、柳田は大正一四（一九二五）年に雑誌『民族』を創刊する。柳田が主宰する雑誌名でいえば、その前の『郷土研究』や昭和に入ってからの『民間伝承』は、いかにも民俗学らしい名称である。『民族』はそれに比して、やや唐突な印象を与えかねない。だが、当時の柳田は太平洋の島々に住む人々をも、視野に入れていた。岡正雄が後年回想しているように、そこには日本以外の諸民族も視野に入れたうえで比較をしなければならない、という強い思いが込められていたのだ［石田、岡他 1945 18］。昭和に入ってから民族についての議論が、文化論や日本論として広く行われるようになった。そこで頻繁に出てくる言葉は統一、融合、秩序であり、いわばナショナリスティックな文脈から民族という用語は用いられた［橋本 1992 8・22］。だが、柳田がここで使う「民族」からは、そうではなく諸民族を横断した学知を目指そうとする意思をこそ、読み取るべきである。第一次大戦後の国際協調という時代背景があったからこそ、得られた広がりと可能性がここからは見て取れる。ナショナリズムに自閉していく思考は、ここにはない。

## ３．ジュネーブ帰国後の柳田と「青年」への働き掛け

### 3.1 「青年」層の多様性

ジュネーブから帰国して三ヵ月後、柳田は東京朝日新聞社に正式入社し、編集局顧問兼論説担当の任に当たった。大正一三（一九二四）年二月のことである。その論説群を見ると、スイス滞在時の国際連盟経験や政治的施策にかかわるものは多い。軍国主義を批判し、国際連盟の原則である国際協調主義を説く論説、人種差別や植民地主義に対する批判や原住民保護の主張といったものである［岡村 2013 224～226］。

そうしたジャーナリストとしての仕事に加え、自らの学問の継承を念頭に置いて「青年」への働きかけを柳田は勢力的に推し進めていく。『青年と学問』という、その著作名からは柳田の

強い意向が伝わってくる。しかし柳田が念頭に置いた「青年」とは、具体的にどのような存在だったのか、今一つ明確ではない。そもそも「青年」と一括できる層が当時、存在していたのか、それ自体が問題となろう。

というのも、戦前の社会は現在とは比較にならぬほど、学歴をめぐる断層は大きかったからである。竹内洋は、その断層は三つあったとする。ひとつは尋常小学校卒や高等小学校卒と、中等学校卒業者である地方の中堅やインテリとの断層。二つ目は中等学校卒業者と、専門学校や大学などの高等教育卒業者との断層だ。さらに三つめは高等教育であっても専門学校や私立大学卒業者と、帝国大学卒業者の間に存在した。ちなみに旧制高校卒業者は、同じ年度の二〇歳男子人口百人に一人を超えることは戦前、ついぞなかった［竹内 2011 37］。これ一つとっても、たとえ同年代であっても「青年」と一括できる層は当時、なかったと言わざるをえない。

『青年と学問』はその題名にある通り、主に「青年」を念頭に置いた講演録からなるが、それぞれの文章の末尾にある講演先を見ると聴衆層はかなり広範にわたっている。東筑摩郡教育会は教員層、栃木中学校は中学生、東京高等師範学校地理学会はその学生、埴科郡教育部会は教員層、鎌倉郡青年会は青年会会員といったように、対象となる層には一貫性がない。大正時代初期に柳田が刊行した雑誌『郷土研究』は、そこに参集する読者層相互の学歴を横断する試みだった［矢野 2023］。だが、ジュネーブ帰国後の柳田の講演先を見ると、学歴を横断しようとする意志よりも、とりあえず聴衆が「青年」層であればどこにでも応じるといった姿勢しか、見えてこない。そのため結論を先取りすれば、柳田が「青年」に向けた取り組みは必ずしも自身が望んだような成果を上げることなく終わってしまう。

### 3.2 日本青年団『青年』での誌上談話会

柳田が最初に働きかけた「青年」層は、青年団の団員である。柳田と青年団とのかかわりについては掛谷舜治が先駆的に触れているが［掛谷 1996］、ここでは日本青年館と大日本聯合青年団が、地方の青年を対象にした出版メディアに着目したい。その一つが月刊誌『青年』である［丸山 2020 14］。柳田が着目したのは、この雑誌だった。青年団団員は全国各地にいる。かつての『郷土研究』同様、そうした青年たちに各地の報告を呼び掛け、巻き込むことができると柳田は考えたに違いない。

『青年』大正一三（一九二四）年八月号には、柳田の名前で「誌上談話会」が初掲載され、以後連載となる。柳田はかつて関わった郷土会を引き合いに出し、「地方生活の中にはまだ明白に知られて居らぬ点が多い」として、こう、読者に呼び掛ける。

> 今度は一つ全国の有志諸君を自由会員とした雑誌上の談話団体を作つて、自分等の今まで気の付かなかつた色々の社会現象、殊に地方居住者の精神生活及び経済生活に於いて、何人も之を考へて見ぬうちにどしくと消え又は変化して行く昔からの仕来りなどを、観察し且つ記録して後の学問の為に遺して置かうと企てた［柳田 2000d 135］。

柳田は郷土会に言及しているが、こうした取り組みはむしろ雑誌『郷土研究』での「紙上問答」欄に近い。そこでは読者が雑誌に質問を投稿し、それに対して別の読者が回答を寄せるという、いわば誌面での談話会的な場が展開していたからである。次の九月号「誌上談話会」冒頭では、編集者が柳田について「郷土研究の権威であるといふ懐かしい柔らかい学者としての印象」があると紹介し、「郷土に関する地誌、動植物、経済史、言語美術、風俗その他興味ある万般の事柄をどんくご投書ください」と呼びかける。

柳田が『青年』に「誌上談話会」を設けたのは、『青年』誌上にある様々な読者投稿欄に着目

したからに違いあるまい。連載を開始した八月号をみると「読者欄規定」として、「青年自由論壇」、「小品文」、「民謡」、「青年俳壇」、「青年歌壇」、「青年倶楽部」といったように、さまざまな形式を通して読者が誌面に参加できるような仕掛けが施されていたからである。そうしたコンテンツに「誌上談話会」を加えても、何ら違和感はない。読者も他の投稿欄同様、こぞって投稿する。おそらく柳田はそう、考えたことだろう。

だが、反応ははかばかしくなかった。読者からの投稿自体がない号がある上に、投稿者の中には宮良当壮、早川孝太郎、中道等といった『郷土研究』以来の旧知の者が混じっているのである。おそらく柳田の依頼による寄稿だろう。それだけではなく大野芳宜や清水松亭、桂鶯北他、『郷土研究』誌上を埋めるためにやむなく柳田自身が使ったペンネームも、ここで再び動員されていく［佐藤 2000 575～580］。『青年』での取り組みは、ほとんど『郷土研究』の二の舞となった感は否めない。結局、翌年六月号、第一一回目で連載は終了。後述するように、柳田が雑誌『民族』を刊行したのはその後となる。

「誌上談話会」がスタートした次の号、九月号には日本青年館の熊谷辰次郎が「民衆娯楽研究会」と題した連載を始める。娯楽の少なさが農村の問題だとする熊谷は、「皆さんと協力して民衆娯楽を研究したいと思ふのもつまりは、健全な娯楽を捜索したいと思ふ念願からであります」として、地方で行われている「盆踊りとか、小唄とか、祭典とか、伝説」の投稿を呼びかけた。「今回本誌に柳田國男先生の紙上談話会を設けるに當つて、茲に民衆娯楽研究会を開会する機会を得ました」と、企画自体、柳田の連載に呼応するものだと熊谷は述べている［熊谷 1924 68］。

だが、「誌上談話会」と異なり、こちらの方には読者からの投稿は絶えることはなかった。九月号には掲載の一例として、青森県の「佞武多祭」が紹介される。それを受けて次の号には長崎県の「須古踊り」と風流踊りの「浮立」とが、踊りの行列順、行列の説明、踊りの説明の順に紹介されている。号を追っても、途絶えることなく全国各地のこうした芸能の紹介が続く。多くの団員にとって祭礼の折に披露する芸能は自らが演じるという点で身近であり、かつ郷土自慢に値するものだったのだろう。大正一四（一九二五）年一〇月の日本青年館開会式に合わせて「第一回郷土舞踊と民謡の会」が開催に至った。催しは、おそらくこの連載なしにはあり得なかったはずだ。

柳田の「誌上談話会」の連載に合わせて編集者が投稿を呼びかけた「郷土に関する地誌、動植物、経済史、言語美術、風俗」といった内容は、およそ青年団員の興味関心を引くものではなかった。郷土教育運動が官民挙げて展開されたのは、もう少し後のことだったのだ。それに対して郷土芸能への高い関心は「郷土舞踊と民謡の会」が以後、毎年実施されるようになったことからもうかがえるように、一貫していた。柳田の目論見と青年団員の関心とは、ずれていたのだ。

青年団団員の学歴は、多くが尋常小学校卒や高等小学校卒といったところだろう。柳田は結局、地方在住のこうした青年団員層の関心を呼び起こし、雑誌に巻き込むことに挫折する。

### 3.3 大学アカデミズムへの関与

他方でこの時期、柳田は大学教育に関与していくようになる。同じ「青年」でも、こちらは当時でも少数派だった高等教育享受層が対象となっていく。その端的な例が大正一三（一九二四）年四月から慶応義塾大学文学部に講師として毎週一回、史学科の授業に出講したことである。それ以外にも年譜を辿ると、柳田と大学の接点はこの時期、目立っていく。

その背景としてここで大学令の公布を挙げておかなければなるまい。原敬内閣は第一次世界大戦後の「戦後経営」のためのスローガンとして、「四大政綱」を掲げた。そのうちの一つが教育施設の改善充実であり、とりわけ重要なのが高等教育機関の大幅な拡充だった。大正七（一九一八）年一二月に大学令が公布され、私立大学や単科大学が認可されるようになる。早稲田や慶応他、私立大学はそれまで大学を名乗っていても、法的には専門学校に過ぎなかったのだ［有馬 2013 170］。

大学令の公布を機に、まず慶應義塾大学と早稲田大学が先陣を切って大正九（一九二〇）年二月に正式に大学として設立、同年四月にはその後を追うように明治大学、法政大学、中央大学、日本大学、國學院大學、同志社大学が続く。高等教育機関の在学者数を見ると大正九（一九二〇）年時点では官立、私立共に二万八千人前後で並んでいたが、その一〇年後には官立の六万四千人に対して私立は九万四千人にまで増す。この時期、青年人口自体が増加傾向にあり、男子の一八歳人口は明治四三（一九一〇）年の約四五万人がその一〇年後には約五五万人と、一〇年間で約二割、増加した。そうした事態が進学需要を規定する一因となっていたことも見落とせない［伊藤 1999 79・94］。

柳田が慶応義塾大学に出講したのは、まさにそうした高等教育拡充期の最中だったのである。その年譜から改めて慶応との接点を見て行こう。柳田が帰国したのは大正一二（一九二三）年一一月八日。それから半月ほど経た二三日には慶應義塾大学政治学会で、三〇日には慶應義塾大学史学会例会で立て続けに講演している。後者では移川子之蔵、松本芳夫、松本信広らが聴講。移川は文学部史学科の人類学教授で、先述したように日蘭通交調査会会員でもあったので、柳田とは以前から親交があった。松本芳夫はすでに大正一一（一九二二）年に炉辺叢書から『熊野民謡集』を出しているので、やはり旧知の間柄である。

慶応義塾大学ではすでに大正一〇（一九二一）年、松本芳夫らによって研究会「地人会」が発足。同一五年まで続いた。ちなみに柳田は同会発足後、「琉球の文献」と題して早速、報告をしている。大正一二年の先に挙げた講演では、夜、地人会として「柳田国男氏帰朝歓迎会」を開催［池田 1981 229・230］。柳田と慶応との関係は、委任統治委員就任の前にまで、さかのぼる。それが機縁となって松本芳夫は『熊野民謡集』をまとめ、また柳田を史学科講師に迎えることにしたのだった［太田 1982 437］。

柳田が担当した科目は「人類学」で、大正一三（一九二四）年から昭和三（一九二八）年まで、足かけ五年間、講義を続けた［慶応義塾 1962 117］。大学令により私立の大学は専任教員の確保、また授業の開講科目の拡充が求められるようになる。大学の専門学部の教授ともなれば、大学院修了や海外留学の経験を持つことが望まれた［天野 2009 394］。柳田の年譜を手繰ると、明治三三（一九〇〇）年七月に東京帝国大学法科大学を卒業後、すぐに農商務省農務局勤務を命じられるのと合わせて、そのまま東京帝国大学大学院にも入学している。その履歴、またスイス滞在が留学体験としての意味合いもあったことを考えると、柳田が大学で教鞭をとるのに何ら問題はなかっただろう。大学令の公布は、非常勤とはいえ柳田に大学での講義の場を与える上で大きな役割を果たしていく。

慶応義塾大学での講義に加え、大正一四（一九二五）年には早稲田大学で「日本農民史」の講義を担当し、二年間続ける。折口信夫が在籍した国学院大学とのつながりも深い。大正九（一九二〇）年の九月と一〇月、折口の自宅で開かれた国学院大学郷土研究会例会で、柳田は「フォクロアの範囲」と題した話をしている。それ以降、昭和二五（一九五〇）年に国学院大学の

教授就任要請を受諾するまでの間、国学院関係の研究会で少なくとも一一回、講演をしている［高見 2010 170］。柳田は大学というアカデミズムの場でも、その活躍の幅を広げていったのがこの時代だったのだ。

## ４．「新しい歴史学」の潮流の中で

### 4.1 柳田と文化史

こうした柳田のアカデミズムへの接近を強く後押ししたのが、大正時代の「新しい歴史学」の潮流だった。それまでの歴史研究に対して「政治史」とひとくくりにすることで批判し、それに文化を軸とする文化史を対置したのが「新しい歴史学」である［山口 2005 110］。そこで大きな役割を果たした一人が、和辻哲郎だ。和辻はランプレヒトの業績を踏まえ、芸術家的な直観を有し、いわば芸術家の才能をも兼ね備えた歴史家の存在を強調する。それまでの歴史学が考証と客観性を旨としてきたことに対し、和辻が提唱する文化史は主観の介入を積極的に肯定する色彩を強めた［山口 2005 100］。

こうした趨勢が、柳田の著作への高い評価にもつながる。大正一四（一九二五）年に柳田が上梓した『海南小記』は、大正一〇（一九二一）年、朝日新聞に連載された南九州や沖縄他、南島方面への紀行文を柱とする一冊だ。その書評のいくつかを見ると、紀行文としての美しさだけではなく、学問的な意義も合わせて取り上げられていたことに注意しておきたい。

たとえば詩人・英文学者の日夏耿之介は『海南小記』に対して、「特に注目すべきは、柳田氏の文品が気品高く詩趣きくすべきものが多い点である」とし、「史的科学の創見は想像力の活発な活動に基くこと云ふまでもない」という。他方、ここで柳田と対比される「専門史家」は「悪文を繰つて断片史料を整理羅列する外に何の特色を見ない」とこきおろされる。そのうえで柳田が「くろうと学者の手を染めざる、寧ろ手を染める能はざる新学問の新境地を開拓して来た」と日夏は高く評価した［日夏 1986 142］。柳田の「想像力の活発な活動」が「史的科学の創見」へと結実したと称揚し、そこに新たな学問の展開を見出す視点は、芸術家の才能をも兼ね備えた歴史家像を提示した和辻の視点と重なる。

慶応義塾で人類学を担当する移川子之蔵も「其紀行文の例によつて流麗なる其べう写の詩の如く絵の如き美しさ、南島の情趣の懐かしさを坐ろによび起こさずにはおかない」と、『海南小記』の文学性の高さに目を向ける。ただし、それだけではない。その描写が「平和のうちの南島の推移が、しかも立体的に忽がき出され」ていることに目を向け、「柳田氏の如き人が日本の古代文化の研究に大切なる南島についてものせられる事は、色々な意味において非常な幸ひである」と、古代文化研究に引き寄せて評価する［移川 1986 147］。これもまた、柳田を新しい歴史学の潮流の中に位置づけて見る一例となろう。

『青年と学問』を見ると、自身が模索する、あるいは関連する学知の営みを、柳田が様々な言葉で言い表していることに気づく。「人類学殊に所謂人種学の比較研究」（30 ページ、以下、全集第四巻のページ数）、「地方学」（100）、「地方研究」（107）、「平民の歴史」（107）、「郷土研究」（131）、「フオクロア」（132）、「国民生活誌」（137）、「エスノロジー」（148）、「民俗学」、「土俗学」（以上 163）、「フオルクスクンデ」、「フェルケルクンデ」、「エスノグラフイー」（以上 164）といった具合だ。

一連の呼称の中で、柳田が「文化史」という名称も使っていることに、ここでは目を向けたい。二か所あり、一つは「自分たちは文化史の学徒としては」（30）、二つ目は「我々の文化史

学」（159）で、ともにこの語を自らの立場に引き寄せて使っている。当時新しい歴史学として台頭してきた文化史をかなりの程度、意識していたとも考えられる。

とはいえその使用頻度は二回にとどまっていることから、むしろ当時、柳田が自ら模索する学知の名称を特定できず、逡巡し続けていた姿をこそ、見出すべきであろう。だからこそあれもこれもと、数多くの用語を使わざるを得なかったのだ。

それはエスノロジーとフォークロアという名称の使い分けにもうかがえる。現在ならば前者を「民族学」、後者を「民俗学」と翻訳するのが一般的だ。しかし、『青年と学問』では、その使い分けに苦慮する柳田の姿がある。柳田の弟子であった大藤時彦は、「先生は、初めのうちは、エスノロジーとフォクロアの違いというものを、そうひどくその間に差別を設けておられなかった」「人類学あるいはエスノロジーという名でもって、いわゆる郷土研究」を行う立場をとっていた、という［大藤 1990 201］。両者の親近性は、大正一五（一九二六）年の講演「日本の民俗学」で、フレーザーの『旧約全書のフオクロア』を引き合いに出して「是れフオクロアとエスノロジーとの婚約であった」［柳田 1998 168］と言及していることからも読み取れる。そういったこともあり、この両者にどのような訳語をあてるのか、柳田は長い間揺れ続けた。岩本通弥は大正九（一九二〇）年から昭和一二（一九三七）年にかけて Folklore と Ethnology 両者を柳田がどのように訳しているか、その一覧を作成している。それを見ると、特に Ethnology に対しては「民俗学」「民族学」、時に「土俗学」の語が入り乱れており、現在のような「民族学」の呼称が定着したのはようやく昭和一〇年代に入ってからだ、とわかる［岩本 2018 44］。柳田にとって自身の模索する学知の輪郭が明確になるまで、それだけの時間が必要だったということだ。

**4.2 国史学との対峙**

とはいえ、それは広義の歴史学として位置づけられる、という考え方自体は一貫し続けた。民族学と重なる分野として、現在、文化人類学あるいは社会人類学と呼ばれる分野がある。柳田自身はこの語を Ethnology の訳語とはしなかったが、人類学という訳語も念頭にあったのは確かだ。それはフレイザーが「自分の学問を Social Anthropology、即ち社会人類学と標榜して居つた」［柳田 1998 150］という一節からも明らかだろう。その人類学に対して、「実は大変に範囲の弘い学問で、歴史なども行くくは其中に入つてしまふかも知れぬのだ」［柳田 1968 48］とまで述べているのは、当時の文化史の隆盛を踏まえると理解しやすい。そして、それは当時の国史学にとってある種の脅威であったことは現在、とかく見失われがちである。

早稲田大学教授の西村眞次が大正一三（一九二四）年に上梓したのが、『文化人類学』である。大正期の「新しい歴史学」である文化史は発生からして多様であり、むしろそれを是としてきたため、その内実には何らかの限定があるわけではなく、多岐にわたっていた。西村眞次もその一翼を担う一人だった［山口 2005 109］。

その西村の著作に対して猛然と異を唱えたのが、東京帝国大学国史学科講師で後に皇国史観で名を馳せる平泉澄である。まずは西村の主張から見て行こう。西村は序文で、こう言う。

> 世界大戦以後、学会に現はれた二つの傾向は、古代研究の盛んなこと、歴史を世界的に綜合しようとする企図の多いことゝである。これらの新傾向は、共に人類学的だと批評することが出来る［西村 1924 1］。

世界が第一次大戦という事態のもとで一つとなり、あるいは世界が一つであることが戦争という現実によって可視的となる。こうした「一つの世界」という空間感覚をもたらしたのが第

一次大戦だった［山室 2011 21］。「歴史を世界的に綜合しよう」とする西村の歴史観は、第一次大戦後に広まった世界に対する認識を如実に反映したものである。西村が指摘した二つの傾向のうち、特に平泉が反発したのが後者だった。この点について、西村はさらにこう続ける。

> 歴史を世界的に綜合しようとする企図は、恐らく帝国主義的な闘争観が誤つた方向へ文化を導いたことに気注いて、世界主義的な協同観に基づいた新傾向へ世界の民衆を導かうとする努力に基因してゐるのであらう［西村 1924 1］。

第一次大戦が「世界主義的な協同観」をもたらし、より普遍的な歴史像が求められるようになる。「在来は歴史を民族の発達の過程を知るものとし、人類学を人類の発達の過程を知るものとしてゐた」。だが、歴史を「世界的に綜合」することを前提とするならば、「私の現在の考へでは、歴史と人類学とを分つことの出来たのは過去のことで、両者は段々接近して来て、しまひには区別することが出来なくなる」［西村 1924 4］という。人類としての普遍性を前に、歴史学と人類学とが一体化するという見取り図は、先の柳田の見解とも共通する。

まさにこの点が平泉にとって、受け入れがたい点だった。平泉はすぐさま『史学雑誌』に「『文化人類学』を読む」と題した書評を掲載する。同誌は史学会の機関誌であり、史学会自体、さかのぼると帝国大学文科大学史学科に設けられたので、それはある意味、国史学の正統的立場からの反論としての意味合いをも担った。

平泉は言う。人類といっても未開の人々は「歴史に目ざめず、従つて未だ歴史の光に浴せざる人類であ」り、それゆえに「彼等は歴史なき人種であり、史学の主題となるを得ざるものである」。そうした人々を対象とする「人類学の性質は、動物学や植物学と同じ立場に在る」に過ぎない。それに対して「意志の自由をもち、従つて一個の人格として道徳的責任を負ふに至り、初めて歴史をもつ」。こうした「文化人」こそが歴史学の対象となり、「動物的生活を送る野蛮人」とは明確に区別されると平泉は主張する［平泉 1925 136］。

平泉は「人」を、歴史を有する「文化人」と、それをもたない「自然人」とに二分する。その文化/自然という対比は、文明/野蛮という基準が形を変えたものであり、その対比を超えた普遍性を歴史に求めることは許しがたい、というのが批判の眼目だ。歴史は一つの国家、一つの民族においてのみ、初めて可能だとする平泉にとって、歴史とは「国史」以外の何物でもなかった。日本の歴史は日本人のみによって担われるものであり、それはとうてい普遍的なものではありえない［昆野 2019 70〜74］。だからこそ、国境を越えた世界的な普遍性の相のもとに歴史をとらえようとする「今しも史界にみなぎりつゝあるこの風潮に対し、試みに一矢を放つた」と、平泉はこの稿を締めくくらざるを得なかった［平泉 1925 138］。既存の歴史学からの危機意識が、ここからは強く浮かび上がってくる。

国際連盟の委任統治がなされるまで、欧米では「土民は人間としてよりも寧ろ地味や気候と同一視されて来た」と痛烈に批判し、委任統治の可能性を展望した柳田は、すでに述べたように民族学に期待した。その意味で柳田と西村眞次は立場を同じくし、「新しい歴史学」である文化史の担い手の一人とみなしても差し支えあるまい。昭和に入ると京都帝国大学では神道史講座が開始されたが、柳田さらに折口は歴史民族学、文化史学の先達として受容されていたことも付け加えておこう［林 2005 68］。逆に平泉の主張は、皮肉にも第一次大戦前までの西欧的な価値観以外の何ものでもなく、柳田には否定すべきものとしか映らなかった。

西村眞次と激突した平泉澄に対し、柳田もまた異を唱える。昭和三（一九二八）年三月、東京帝国大学山上御殿で開かれた史学会での講演、「日本婚姻制の考察」がそれだ。その冒頭で柳

田は「自分は今日の史学の先生の中に、国史といふものは優れたる人格の自ら意識して為し遂げたる主要事績だけを、跡付けて居ればそれでよいと、言つた人のあることを知つて居る」とし、それでは現代の期待に副うことはできないと批判［柳田 1999c 627］。さらに舌鋒は鋭く追い打ちをかける。その対象は明らかに平泉澄であった。会場には六〇人ばかりの参加者がおり、史学会幹事の平泉は講師席の横で聴講していた。面前で柳田に痛烈に批判されたその顔は、蒼白だったという。

この講演は追って『史学雑誌』に掲載予定とされていたが、結局それは見送られた［若井 2006 101～103］。平泉を徹頭徹尾、批判した内容は、とうてい史学会の機関誌には掲載できなかった、ということだろう。それだけ柳田の発言は重く受け止められたことになる。結局、講演内容は翌年、「聟入考」と題して『三宅博士古稀祝賀記念論文集』に所収され、「史学対民俗学の一課題」という講演時にはなかった副題が付けられた。『史学雑誌』への掲載が見送られた柳田の強烈な対抗意識が如実に伝わってくるエピソードだ。

それはともかく、ここで目を向けたいのは史学会という帝国大学文科大学史学科時代から設けられた、その意味で歴史学としてもっとも権威ある場で柳田が講演をした、という点である。講演後、その概要が『史学雑誌』に「史学会三月例会記事」として掲載された（第三十九編第四号・昭和三年）。その末尾には「氏はこの御講演の序論として平素抱懐せらるゝ民族学の方法論に関する所説を披歴せられたる」と、編集者のコメントが附け加えられている。柳田の立場は「民族学」とあるが、西村の『文化人類学』が新しい歴史学の一環として受け止められたことからすれば、柳田のそれも同じような受け止めがなされたことだろう。だからこそ史学会に招かれもし、柳田もそれに応えたのだ。滞欧時、民族学や言語地理学の最先端の知にふれ、数多くの洋書を読みこなした柳田の存在は、史学会であっても無視しえないものとなっていた。柳田が大学に出講するようになったのも、こうした背景あってのことだったのだ。新しい歴史学、すなわち文化史の潮流は、アカデミズム世界での柳田の存在感を大きく高める結果となる。

## ５．雑誌『民族』の発刊と「青年」への期待

### 5.1 大学での後継者育成の困難

柳田は慶應義塾大学への出講や国学院大学の研究会への講演他、様々な形で大学にかかわっていく。それも自らの後継者を見出し、そして育成しようという目的あってのことだったが、結果としてはこれもまた、うまく実を結ぶには程遠いまま終わる。

慶応義塾大学文学科の講義だが、そもそも受講者数自体がごく限られていた。史学科で開講していた柳田について、国文学科卒の中西三郎が当時を振り返っている。それによれば史学科の学生はわずかに十指に足らぬほど。国文学科の学生の方が熱心に聴講したとはいえ、中西の同級生は四人に過ぎなかったという。その講義は論理が急に飛躍し、あるいは脱線し、挿入があったりで面食らうことが度々で、ノートを取りにくいものだった。民間伝承といい、あるいは民俗学といい、いまだ海のものとも山のものともつかず、茫漠としてつかまえ所がなかった、というのが授業への感想だ［中西 1971 5・6］。受講者数自体がわずかだったうえに、つかまえ所がない柳田の授業。結局のところ、慶應義塾での出講を通して後々まで民俗学を支えるに足る人材となったのは桜田勝徳程度、であろうか。

国学院大学での研究会他、学生への接近も後継者の育成にはつながらなかった。国学院で折口に師事した作家・伊馬春部の回想を見てみよう。折口が柳田の前で示す弟子としての礼譲を

目の当たりにした伊馬は、「あの可怕い先生のそのまた上に巨大な先生が存在するといふ事実をまざまざと実感しては、私はひたすら身の縮む思ひだつた」と振り返る［伊馬 1969 7］。折口信夫は慶応義塾大学の教授でもあった。そこでの弟子・池田弥三郎の回想でも、柳田は自身の直接の師匠であった折口信夫の先生であり、そして折口の柳田に対する心身ともにへりくだった態度を見聞きしていたため、折口存命中にはとても気楽に近づくことはできなかった。柳田は「折口先生のうしろから、遠くに仰ぎ見ている先生、という存在」であり、それが故に折口が生前だった頃は柳田から直接話を聞くこともなかった、という［池田 1981 13］。師匠のさらに師匠に対しては、恐れ多すぎてとうてい近寄ることができないという思いで両者は共通する。柳田はそうした学生たちの師となるには、あまりにも遠く、かつ重たすぎる存在だった。

柳田は慶応義塾大学でも国学院大学でも折口の弟子に対しては師となることができず、また週に一度の出講程度では、ごくわずかの例外を除いて後継者を見出すことはほとんど叶わなかったといっていい。常勤職ではない以上、それは無理だったのである。

**5.2 雑誌『民族』での共同編集者の発掘**

こうした事態を打開すべく、自らの老いを実感し後継者育成を真剣に考えていた柳田が打った手は、雑誌を新たに刊行してその編集者に若手をあてる、という方法だった。

青年団員を読者層に据えた『青年』掲載の「誌上談話会」連載取り止めは大正一四（一九二五）年の六月号。この年一一月に柳田が心機一転、創刊したのが雑誌『民族』である。同誌は隔月刊行で、昭和四（一九二九）年の第四巻第三号で休刊するまで続く。

その発起人、編集委員として柳田がまず声をかけたのが民族学を専攻とする気鋭の若手、岡正雄である。その年譜［岡 1979a］によれば、明治三一（一八九八）年、長野県松本町（現・松本市）生まれで、第二高等学校を経て大正一三（一九二四）年に東京帝国大学文学部社会学科を卒業。高校在学時からエンゲルスの『家族・私有財産及び国家の起源』やモルガンの『古代社会』を読み、民族学への興味を深めていた。岡はこの年、まだ二七歳を迎えたばかりである。

柳田との出会いは大学卒業の直前、大正一三（一九二四）二月。雑誌『郷土研究』刊行に尽力していた岡村千秋が同じ長野県出身ということで、柳田邸に案内してくれたのだった。岡から「エスノロジーをやろうと思います」と聞いた柳田は、いかにも感慨めいた調子で「東大にもエスノロジーをやる者が出てきたか」と口にした。岡はその情景が後々まで目に残っていると回想している［岡 1979b 399］。エスノロジーに可能性を見出していた柳田にとって、東京帝国大学を卒業したばかりの前途ある青年の志望に大きな期待を寄せたことは間違いあるまい。五〇歳を目前にした柳田にとって、まだ二〇代後半の岡は将来を託すに値する「青年」として映じたことだろう。

発起人、編集委員には金田一京助、折口信夫が当たると思っていた岡にとって、柳田からの依頼は驚きであり同時に困惑でもあった。さらに岡の知人、友人の勧誘が求められる。その要請を引き受けたのが有賀喜左衛門、奥平武彦、石田幹之助、田辺寿利だった［岡 1979c 378］。いずれもが東京帝国大学卒業という経歴を持ち、正統的な学問上の後継者たりうる「青年」だったという点で共通する。

後に農村社会学者として大成する有賀喜左衛門は、明治三〇（一八九七）年生まれ。第二高等学校在学時に二学年、岡の先輩だったことで面識を持つ。白樺派の影響を受け、朝鮮の仏教美術や李朝の陶磁器の研究をし、東京帝国大学文学部美術史学科を卒業。奥平武彦は明治三三

（一九〇〇）年生まれで、東京帝国大学法学部卒業。ドイツ人文地理学や政治地理学の祖と言われたラッツェルを研究していた。東洋史専攻の石田幹之助はこの中では最年長で、明治二四（一八九一）年生まれ、東京帝国大学史学科を卒業。田辺寿利は東京帝国大学文学部社会学専攻を卒業し、デュルケームやコントのフランス社会学を紹介。生まれは明治二七（一八九四）年なので、『民族』創刊時に有賀と奥平はまだ二〇代、田辺と石田にしてもまだ三〇代前半の若さだった。岡が当初、『民族』の編集を担うだろうと考えていた金田一京助は『民族』創刊時、四三歳、折口信夫は三九歳である［永池 1988 738・743］。

岡達は金田一や折口と比べ、一回り年齢が下だった。柳田となると、その年齢差はさらに広がる。それは岡達からすれば、大学で自らが指導を受けた教授たちと柳田とがほぼ同年齢となることを意味した。岡と田辺が師事した建部遯吾は明治四（一八七一）年生まれ、有賀の卒論審査主任の滝精一は明治六（一八七三）年生まれなので、明治八（一八七五）年生まれの柳田と年齢差はほとんどない。

そういったこともあり、柳田と岡達若手との間には疑似的アカデミズムとでもいうべき場が展開することとなる。岡正雄の大学での師・建部遯吾の講義では、universal law を「普遍法則」ではなく、「万象恒常の道」といった古色蒼然とした訳をしていたように、失望に値するものでしかなかった［岡 1979 396］。だが、柳田は違った。エスノロジーの本を自由に利用するようにと言われて岡が柳田の書斎を訪問すると、読みたくても手にすることができなかったエスノロジーの洋書新刊本が所狭しと並んでいる。南米エスノロジーの第一人者・ノルデンショルドの『比較民族学』、リヴァース『メラネシア社会史』、ジレンやスペンサーのオーストリアの民族学関係の本ばかりではなく、デュルケームやモースの論文を掲載する『社会学年報』まで揃っていたのに岡は驚く。この雑誌は、東大の社会学研究室にもなかったからだ［岡 1979c 376］。その意味で柳田の書斎にある蔵書は、当時の東京帝国大学の研究室よりも充実していたのだった。岡がその世界に魅了されたのも、当然と言えば当然だろう。

大正後期、ヨーロッパでは人類学関連分野での理論の展開が目覚ましく、この時期に本格的に研究生活に入り始めた日本の若い世代の研究者はそうした成果を積極的に摂取するようになった［清水 2013 71］。スイスへの渡欧で最先端の民族学にふれ、そして数々の専門書を購入して自らの蔵書としていた柳田は、岡正雄をはじめとする若手の研究者に対して大きな求心力をもった存在としてその眼に映じたに違いない。

柳田を中心とした場が、当時『民族』の編集担当をしていた「青年」たちにとっていかに魅力的な場であったか、石田幹之助の回想をみてみよう。石田もまた蔵書の「数の多いのと各部門がよく網羅されてゐるのに驚いたものであつた」とし、『民族』の編集のために毎月、柳田の自宅に集まるのが楽しみだったという［石田 1986 195］。編集の打ち合わせが済むと、その場は「読書会のやうなものに早変わりして、新刊の批評や感想の述べ合ひが始まり、それに先生が色々懇切な意見を述べられて指導され」たと、その場の様子を伝える［石田、岡他 1945 19］。有賀は有賀で、当時の柳田は「先生独自の日本研究を民族学ないし文化人類学と関連させて展開し、日本民俗学を創設しようとする大きな理想に燃えていた時」だったという。それに対して編集担当の若手はいずれも「新しい民族学や社会学や地理学のいずれかに強いあこがれを持っていたのであった。そのことが先生と私たちとを結び付けた」［有賀 1969 1］と、来るべき学問を模索する場の熱気を振り返る。柳田を囲む場は、後になると参加者それぞれが各地の伝承について報告し、柳田がコメントするといったような一方向的なものとなる。だが、この時点

ではそうした報告ではなく、新刊の批評、感想を述べあう双方向的なものだったことに目を向けておこう。そこは新たな学問への胎動をはらんだ坩堝と化していたのだ。

柳田が昭和二（一九二七）年九月、新たに成城に居を構えたことも見逃せない。それまで住んでいた市ヶ谷加賀町の家は細長く伸びた平屋造りで、その北端に建て継ぎされた日の当たらぬ大小の二間が柳田の書斎にあてられていた。蔵書はそこに収まりきらず、家屋のあちこちに分散されていて不自由この上ない状態だった［柳田為正 1996 75］。それが成城の新居では一転する。一階の大部分を占めているのが四〇畳ほどもある部屋で、書庫兼書斎となっていた。それまで分散していた本を一堂に集め、一目で柳田の机から見渡せる、そして開放的で多くの人の出入りを快く受け入れることができるような作りである［堀 1970 4］。

柳田はこの家に移るや、すぐさま多くの「青年」たちを自宅の書斎に招き学問談義に興じる。転居して一か月ほど経た時点で胡桃沢勘内にあてた書簡には「若い諸君の来つて書を読むもの折々有之又同人とも名くべきもの日曜には沢山集まり自由なる話をいたしをり候」［柳田 1971b 527］とあり、新居で若手の研究者たちと心置きなく語り合っている姿が浮かぶ。さらに岡正雄をこの家に同居させて研究にいそしませる。岡は「先生のところに住み込んだ者といえば、僕が最初にして最後の弟子かも知れない」［岡 1979c 386］と振り返っているが、たしかに柳田の年譜を手繰ってもその手の記載は他にはない。何人もの弟子を自宅に住み込みとさせた折口とは、その点が大きく異なる。それだけ岡に柳田は期待していた、ということだ。

**5.3 雑誌『民族』の寄稿者群像**

柳田は『民族』をどのような雑誌にしたかったのだろうか。創刊号の「編輯者の一人より」は、柳田の手になる。雑誌としての「たゞ一点の合致は日本民族の過去生活の真相が、最も雄大なる単一題目」であり、「若し強ひて学風の協同を指摘すれば、比較研究法である。事実の忠実なる採録と考察である」という。さらに「同人当初の趣旨は、どこまでも現代の連絡に在つた」とし、「我々の手帳は此雑誌を通じて、順次に国内同志の公有たらんと」して、資料は「この共同の文庫に陳列せらる」のだ、と編集の力点を示す［柳田 2000e 486］。比較研究法といい資料の公有といい、八年前に休刊した雑誌『郷土研究』での方針と大差ない。その意味で『民族』は『郷土研究』をそのまま引き継いだ雑誌のように見える。

だが、いずれも東京帝国大学を卒業した若手を編集に引き込んだこの雑誌には、『郷土研究』と大きく異なる点があった。それはアカデミズムの場に軸足を置いた比較的若手の研究者の原稿を積極的に掲載した点である。岡正雄らが編集者として加わった以上、そうした方向性はある意味、当然といえば当然の結果であろう。

雑誌としての体裁がほぼ整った第一巻第二号の目次を見ると、「資料・報告・交詢」欄が設けられており、各地の正月行事を中心とした報告が並ぶ。だが、各報告いずれもせいぜい二、三ページ程度でごく短く、しかも置かれているのは雑誌の後半だ。前半を飾るのはそうした報告ではなく、論文形式の文章である。創刊号では京都帝国大学助教授で考古学専攻の濱田耕作、前年に東京帝国大学助教授を辞した人類学者の鳥居龍蔵、京都帝国大学教授で天文学者の新城新蔵といったアカデミズムの世界ですでに名をなした人物の原稿が続く。

だが当時、自らの研究を本格させつつあった赤松智城、宇野円空、秋葉隆といった宗教学専攻者の寄稿が、次第に目に付くようになる。

まず第一巻第三号には赤松の「古代文化民族に於けるマナの観念に就いて」を掲載。マナという用語はもともとメラネシア群島の言葉であり、その重要性にフレーザーやマレットが着目

した、ということから論議が始まるこの論考は、太平洋の島々に関心を寄せていた柳田の問題関心にも重なっていたに違いない。明治一九（一八八六）年生まれの赤松は明治四三（一九一〇）年、京都帝国大学文科大学哲学科宗教学を首席で卒業。大正九（一九二〇）年から約三年間、欧米に留学しており、『民族』に寄稿時は龍谷大学の宗教学宗教史講座の教授であった［菊地 2007］。

赤松の一歳年長で明治一八（一八八五）年生まれの宇野円空が最初に『民族』誌上に寄せたのが、第一巻第五号の「呪術論の進んだあと」だ。呪術が学問的に取り扱われてきた流れを、マレットやモース他の論議を紹介しつつ論じ、呪術論が常に宗教起源論と結びついてきたと指摘する。宇野は明治四三（一九一〇）年に京都帝国大学文化大学哲学科宗教学専攻を卒業、赤松と同年、ヨーロッパに留学し、龍谷大学教授に任命。『民族』に寄稿した大正一五（一九二六）年には東京帝国大学文学部講師となっていた。

宇野は「大正天皇の御即位礼に際し大嘗祭のあとを拝観し、同時にその祭儀に関する古録の二三を読んで、その宗教民族学的意義」に関心を抱いたという。その後パリに留学した折、太平洋諸民族の社会と宗教との研究でマルセル・モースに師事。「近隣民族の文化特に宗教に関する民族学的事実の再吟味が、わが日本学との責務たることを痛感した」という［宇野 1941 1］。大嘗祭を起点として宗教民族学に関心を寄せ、太平洋諸民族に目を向けるその問題意識は、まさに柳田の関心と重なり合う。宇野が『民族』に原稿を寄せたのも、十二分に納得がいく。

秋葉隆は明治二一（一八八八）年生まれで、東京帝国大学文学部本科（社会学）を卒業後、大学院に進学。大正一三（一九二四）年に京城帝国大学予科の講師に任命されるとともに、民族学の研究のためにイギリス、フランスに留学。帰国後の大正一五（一九二六）年には京城帝国大学助教授に昇任。約二〇年に渡って朝鮮、東北アジアのシャーマニズムを中心に調査、研究を進めた。赤松智城とは『朝鮮巫俗の研究』、『満蒙の民族と宗教』の共著がある。近代化が進みつつある朝鮮にあって、巫俗はやがて消失してしまう、それが故にその前に記録しておかなければならないという問題意識［坂野 2005 320～322］は、柳田のそれとも共通するだろう。秋葉は『民族』第二巻第六号（一九二七年）に、「博物館巡礼」と題した小編を寄稿した後、翌年の第三巻第五号に「奠鴈考」を掲載。サブタイトルに「朝鮮婚姻風俗の一研究」とあるが、朝鮮半島での一七か所に及ぶフィールドワークに基づいた成果である。

雑誌『郷土研究』での民間信仰を重視した問題意識は、柳田の神道談話会への参加を踏まえたものとして位置づけられるが［渡 2023 244-246］、『民族』でもその関心は一貫している。いや、『郷土研究』刊行時にはまだ研究者としての足場がなかった若手を巻き込むことによって、より一層、明確な姿を取るようになったというべきだろう。自らの学問の後継者を育成する場として雑誌『民族』を機能させるという柳田の目論見は、ある時点まではたしかな成果を上げたように見えた。

## ６．雑誌『民族』の挫折

### 6.1 日本を超えた視野の広がりと民族学への期待

『民族』誌上からは太平洋の島々への関心も色濃く見いだせる。それは国際連盟委任統治委員として沖縄の延長線上にそうした島々を位置付けるようになった柳田の姿勢をそのまま、映し出したものである。

第一巻（一九二五－二六年）を見てみよう。第四号には地理学者・山崎直方がハワイを対象

とした「タロ芋の話」を、第五号には歴史学者・坪井九馬三が「太平洋研究の意義」を、第六号には人類学者・松村瞭が「第三回汎太平洋学術会議に就いて」と題してその概要を紹介している。第二巻（一九二七年）になると、宇野円空が第三号、第四号と続けて「南セレベス、ドリの旅」を寄稿。文字通りインドネシアのセレベス（現スラウェシ島）への旅行記で、宇野の年譜には大正一四（一九二五）年六月から一二月まで「インドネシア南洋へ研究旅行」とあるので、その時の記録だろう。第三巻では、人類学者・長谷部言人が南洋庁嘱託に任ぜられ、その管下にある太平洋の島々の研究に従事することになって渡航した際の随筆「南洋見聞」を掲載。長谷部は後に『過去の我南洋』を刊行している。第五号にはフランスの東洋学者シルヴァン・レヴィの「海洋の民族学的研究綱領草案」の翻訳が掲載されるといったように、『民族』に掲載された文章の柱の一つとして太平洋諸島への言及があった。

レヴィの原稿に限らず、『民族』誌上では積極的に海外の文献や研究動向の紹介、またそうした動向を踏まえた論考が掲載されている。『民族』以前の『郷土研究』にはなかったことだ。柳田自身がその後の滞欧時、数多くの洋書を購入して若手の研究者の便宜を図っていたことも大きかっただろう。

そうした経緯もあって編集役に声をかけられた岡正雄他の原稿には、とりわけその傾向が強い。第一巻での動向を見てみよう。創刊号（一九二五年）には岡正雄が民族学者・リヴァースの「民族学の目的」を、奥平武彦は「ラッツェル以後」と題して、人類地理学と政治地理学を創設したラッツェルとそれ以降の研究の流れを紹介した論考を、石田幹之助は「書庫の一隅より」として多くの海外文献の紹介を掲載している。第二号では田辺寿利が「デユルケム派の宗教社会学」と題して、第五号まで連載。有賀喜左衛門の初掲載は第四号の「シャマンの服飾について」。日本以外の様々な民族のシャーマンを対象として数多くの海外文献を駆使した、後の農村社会学者としての業績からは想像しにくい内容となっている。

『民族』は民族学や考古学、社会学、言語学他、多様な分野の寄せ集めのように、現在からは見えてしまう。だが、こうした多様性自体は当時の新しい歴史学がはらむ特徴の一つだったこともまた、たしかである。すでにふれた平泉澄が批判した西村眞次の『文化人類学』の目次を改めて見てみよう。「第一章 緒論」の後は、「第二章 考古学的考察」、「第三章 工芸学的考察」、「第四章 社会学的考察」、「第五章 言語学的考察」、「第六章 土俗学的考察」、最後に「第七章 結論」という構成である。これを多くの分野のたんなる羅列ではなく、様々な分野を横断しつつ一つの全体をなす歴史像と受け止めたからこそ、平泉もこの書に対して一矢を報いなければならないと考えたに違いない。

『民族』は多様な分野を横断しつつ、その先に新たな学問の胎動を予感させる雑誌だったのだ。その雰囲気の一端を浮かび上がらせるのが、『民族』第二巻第六号（一九二七年）末尾に掲載された岡書院からの「人類学叢書」発刊の広告だ。その「人類学叢書発刊に就いて」を見てみよう。「遂に、人類学時代は到来した」で始まるその一文は、「今や如何なる科学も人類学の寄与を顧みずしては、一日としてその科学としての存在を支持することは難くなつた。かつて哲学が、凡ゆる科学の科学たりしが如く、人類学は、凡ゆる現代科学の基礎学又は指向学たらんとしつゝある。人類学的認識は正に学問の出発点となつた」と続く。そして「江湖諸士よ、この多望なる人類学時代に先駆して、新興科学建立の事業に協同の手を賜へ」と締めくくられる。あらゆる現代科学の基礎学、学問の出発点といった言い回しは今から見ると、いかにも大仰な内容だ。新しい歴史学どころではない。

だが、大仰なだけと限らなかったことも確かである。当時を振り返って岡正雄は「ちょうどそのころわが国には、人類学的諸科学への興味が勃然と興り、なにか人類科学の興隆が待望されるような一時期でもあった」［岡 1958 310］と述べているからだ。それだけではない。大正時代を代表する評論家・土田杏村が寄せた「『民族』を読みつつ」を見てみよう。先の広告があながち誇大宣伝ではなかったことが伝わる。

> 哲学の立場は依然として理論的です。この理論的の考察に自然的の基礎を興へるものが自づから要求せられます。それが民族学ではないかと考へます（途中省略・引用者）。
> 経済学も政治学も民族学に帰るべきです。また勿論哲学も民族学に帰るべきであります。今後其等の文化諸科学者哲学者が民族学の論著を読む傾向は一層強められるに違ひないと、私は考えて居ります［土田 1928 140］。

ここからは学問全体の根底をなす清新な学としての民族学への期待が、如実に伝わってくる。

広告の末尾には人類学叢書のラインナップも掲載されており、それを見ると長谷部言人『第一篇　自然人類学概論』から赤松智城『第九篇　宗教社会学』まで全九冊のシリーズである。掲げられた著者一三名の内、この広告が掲載されるまでに『民族』に一度でも寄稿した者は一〇名、広告掲載後の次号、次々号にさらに二名の原稿があるので、ほぼすべての執筆予定者が『民族』関係者となる。「人類学叢書」は、そうした意味で『民族』という雑誌形態から、さらに専門書という形態への発展形として位置づけられよう。

しかし、その後実際に刊行されたのは、広告掲載と同時に新刊となった長谷部言人『自然人類学概論』や、続刊となった宇野円空『宗教民族学』等計四点に過ぎない。予告されたものの未完に終わった叢書の中には、柳田と岡両名の共著『民族学概論』も入っていた。柳田が自分以外の著者と共著名義で出版したものは、昭和一七（一九四二）年の『日本民俗学入門』程度しかない。柳田が当時、民族学、さらに岡に寄せた期待の大きさが、ここからは垣間見える。いずれにせよ、人類学叢書の刊行は結果としては所期の成果を上げることなく終わった。それは後述するように昭和初年以降、学知をめぐる構図が大きく転換したことにも起因した。

**6.2 雑誌『民族』への柳田の複雑な思い**

岡との共著『民族学概論』が刊行されなかったことから浮かび上がってくるのは、柳田の『民族』誌面への複雑な思いである。「編輯者より」欄は、柳田自身の手になる。創刊号では「年棚（年徳棚）の飾り方、之に関連した行事風習、並に正月様の送迎に付ての言ひ伝へを記録して置かうと思ふ。如何なる簡単な材料でも、どしく御寄興ありたし」とある他、婚姻儀式の慣行、神隠しや天狗つきについても寄稿するよう、読者に呼び掛ける。

以後も、誌面でいえば後半の各地からの報告についての言及が、ほぼ全てを占める。どのような資料が必要かだけではなく、さらに「学問上に必要なき美文修辞、若くは単なる礼儀見たやうな文句を付加せず、出来るだけ発明に問題だけを叙述せられんことを切望する」（第二巻第一号）といった報告の体裁にまで、その言及は及ぶ。実際、「折角の美文もあつたが、力めて要点を精確に抄出して、多量の省略を敢行した」（第二巻第二号）とあるように、集まった資料報告に対して容赦なく手を入れることさえ、している。そうした姿勢は、雑誌『郷土研究』時代と全く変わらない。

だが柳田にとって、雑誌『郷土研究』発刊時とは違う、確かな手応えを感じていたことも、また確かだった。先の第二巻第二号の「編輯者より」には、こう記しているのだ。

> 三十五箇所の新年習俗の比較を試みて、始めて読者が自然に感するであらうと思ふことは、

以前たゞ珍奇不可解なる現象として、茶話の題材を供するに過ぎなかつた諸現象が、此方法を以て進んで行くうちには、やがて最も能弁に其意味を語るだらうといふことである。是は取りも直さず学問の勝利であり、又「民族」の功績である［柳田 2001a 217］。

『郷土研究』時代から比べると全国各地からの資料の集積が進み、その比較を通じてこれまで趣味的としかとらえられていなかった事象が大きな意味を持つようになる。それを柳田は学問の勝利、さらには『民族』の功績だとさえ、言う。だが、ここには雑誌の前半を占めるアカデミズムの立場からの論文への言及は、全くない。いや、この号に限らず他の「編輯者より」を見ても同様だ。あえて言うとすれば論文執筆者に対して「論文は成るべく本誌の材料を利用」するよう、注意を促す程度に過ぎない［柳田 2001b 248］。「編輯者より」で触れるのは、あくまでも全国各地からの報告を求める様々な習俗のことだけだ。民族学への期待が高まり、その学問的意義が重視されつつあった当時、柳田のこの沈黙は奇異にさえ、見える。アカデミックな論文と各地の習俗のごく短い報告という二つの方向性が相交わることなく混在する誌面構成に対し、柳田はそのどちらに舵を切るのか考えあぐねているように見えて仕方がない。

そうした沈黙の挙句、柳田は雑誌のあり方、特に前半におかれた論文に対して怒りをあらわにする。第二巻第六号（一九二七）年の「編輯者の一人より」がそれだ。

折角沢山のよい報告が出て居るのに、本誌の研究はどれも是も、横ぞつぱうを向いて自分の卓見のみを独語して居られるのは不本意である。悪くすると二つの相長屋住居の様に世間から評せられるの危険がある［柳田 2001c 364］。

その前の号までこの欄は「編輯者より」となっていたが、あえてここで「一人」と入れたところに、他の若手とは意見を異にするという柳田の強い思いが見て取れよう。

### 6.3 『民族』終刊へ

雑誌の前半を占める論文に対して、各地からの報告を使わずに「自分の卓見のみを独語」すると、厳しく言い放つ柳田。しかしそうした論文に不満があれば、柳田は掲載を拒否することも十分、可能だったはずだ。実際、『民族』に寄せた折口信夫の論文「常世及びまれびと」の掲載の可否を巡って柳田と岡正雄が激しくやり取りをし、柳田が『民族』の編集から降りた後、ようやく掲載できたことを岡本人が明かしている［岡 1979c 380］。

たしかに宇野円空や赤松智城の論文を見ても、日本での事例は取り扱われてはいない。『民族』に掲載された数多くの報告が全く活かされていないことは、一目瞭然だ。柳田のいら立ちは、理解できなくもない。日本での事例も取り入れつつ岡正雄は『民族』に「異人その他」（第三巻第六号）を掲載しているが、当時の民族学には岡を除いて日本を主要な研究対象とする者はいなかったという事情は、やはり大きい［清水 2013 78］。

さらに言えば宇野や赤松だけではなく、『民族』誌上前半に掲載された論文では、マナやシャーマン、トーテムといった学術用語が時にはそのアルファベット表記も交えて、ごく当たり前のように使われていた。だが、それも柳田にとっては内心、是認しがたいものだっただろう。柳田は滞欧時、言語が国家や民族の力関係に貫かれていること、外国語の教養自体が言語間の不均衡な力関係を発動させ、強化する装置であることを強く意識せざるを得なかったからである［岡村 2013 141］。英米圏由来の学術用語が何のためらいもなく『民族』誌上で使われていることに、柳田は違和感をぬぐえなかったに違いない。柳田は『民族』に「杖の成長した話」や「楊枝を以て泉を卜する事」他いくつも原稿を寄せているが、民間信仰に関する内容であるにもかかわらず、マナやトーテム、シャーマニズムといった用語はかたくなに使ってはいない。

さらに言えば、民族学関連の洋書からの引用も、一つとしてない。

民族学に期待を寄せながらも実際に掲載された原稿に対して距離を置いた柳田は、『民族』に掲載された太平洋諸島に関する原稿についても、満足していなかっただろう。主にアカデミックな方向からの内容は、太平洋諸島の「委任統治領における原住民の福祉と発展」に直接、寄与するようなものではなかったからである。柳田は『民族』から次第に手を引いてゆく。第三巻第五号（一九二八年）の「編輯者の一人より」は明らかに別人の筆となり、巻末にはそれまでなかった学会消息欄が新たに設けられた。そして第四巻に入ると柳田は編集から完全に離れ、第三号で雑誌自体、終刊となる［永池 1988 760］。

**6.4 「比較」という方法**

だが、柳田自身にも問題があったと言わなければなるまい。太平洋諸島と日本の事例について、その類似に何度となく注意を払った柳田ではあるが、自身、『民族』に掲載した論考にはそうした海外との比較をしたものはない。すでにふれた『民族』誌上の「杖の成長した話」、「楊枝を以て泉を卜する事」や、さらに「争ひの樹と榎樹」、「天狗松神様松」は、戦後、『神樹篇』として刊行された。その構成は個々の論考の刊行順となっているが、『民族』掲載の各論考の前に置かれているのは、『郷土研究』に掲載した一連の論考である。題名を見ると「柱松考」や「諏訪の御柱」、「勧請の木」といったように『民族』掲載のものと比べても、全く違和感がない。ここから浮かび上がるのは、柳田の問題意識が滞欧経験を経てもほとんど変化していなかった、という一事だ。

そうした点は資料との向き合い方についても、同様である。大正三（一九二四）年、『郷土研究』誌上に掲載した「郷土誌編纂者の用意」で柳田が指摘する四点のうち、最後は「比較研究に最も大なる力を用ゐること」。その一一年後、大正一四年の講演で「郷土研究の要件」として挙げられている七点のうち、一つがやはり比較の重要性となっている。「出来る限り多くの地方と聯絡を保ち、互ひに相助けて比較をして見ること。必要があれば其比較を国の外、世界の果まで及ぼすこと」［柳田 1998 146］というのがそれだ。この一〇年間で各地方から資料報告を得られるようになり、また柳田自身、太平洋諸島と日本とで類似した事象があることに気付き、その視野を海外にまで広げた。そうした変化がここから読み取れようが、比較それ自体を重視していることに変わりはない。滞欧経験以前と以後と、その点で一貫している。

柳田は滞欧時、多くの専門書にあたり、また当地の大学の講義を聴講している。それはすでに述べたように、あたかも留学体験としての意味をも持つものだった。では、その体験は柳田の学知に何をもたらしたのか。あるいは何故、にもかかわらず比較という手法にこだわり続けたのか。

この点に関する岡村民夫の指摘は、それまでなされてこなかっただけに極めて重要なものといっていい。柳田がジュネーブで出会ったのは、民族学だけではない。ウジェーヌ・ピタールとその言語地理学こそが、柳田に大きな影響を与えたのである。言語地理学によって、日本における地域間の微細な差異を総合的に比較し、時間軸にしたがって体系的に秩序付ける確固たる視座を柳田は得ることができた、と岡村はいう。言語地理学と出会うまで、地域的特色に対する気づきは経験的で断片的な次元を出なかった。しかし、柳田は言語地理学の研究を通し、日本地図上で空間的差異を網羅的に比較し、体系的に時間的差異に翻訳するという方法論を獲得したのである［岡村 2013 317・318］。それが『蝸牛考』の成果につながっていく。同じく「比較」の重要性を説くにしても、この点において柳田の視座は大きく転換したのだ。

**6.5 柳田の挫折、再び**

とはいえ他方でその転換は、ある種限定的だったことも否定できない。柳田とフレーザーとを対比させた伊藤幹治は、両者の共通点として事実の収集と記述に強い関心を寄せていた点を挙げる。いずれも膨大なデータを組織的に集めたが、共にそれを分析し、理論を構築しようとはしなかった［伊藤 1998 6］。その点で関連する語彙を網羅的に集めて比較する言語地理学は、数多くの資料を基に比較を重視する柳田の手法と相性がよかったということになろう。それゆえ滞欧経験を経ても、柳田は比較という手法を放棄せずに済んだのだ。

だが、同時にそれは柳田にとって社会学や民族学の新たな理論の受容を阻ませるような結果をもたらしたことも、確かである。たとえばデュルケームやマリノフスキーの業績への受け止め方がそれだ。『民族』誌上には、田辺寿利がデュルケームの宗教社会学の紹介をしている。しかし、柳田はその主著『宗教生活の基本形態』を所持していたにもかかわらず、読んだ痕跡はない［竹沢 2017 254］。また機能主義人類学者・マリノフスキーの主著『西太平洋の遠洋航海者』にしても、その書き込みは本文にある事例に対して対応する日本の事例を示すに止まっていた。たとえば死者の霊が下界から訪れる収穫祭の踊りの箇所の余白に、「〇盆踊」と書き入れる、といった具合だ。柳田は結局この書を他の民族誌と同じように読んだに過ぎず、参与観察法という画期的なその方法自体には関心を寄せることはなかった［伊藤 2002 74・84］。マリノフスキーの人類学の核心であるフィールドワーク論や文化の総体的見方において、柳田が多くの影響を受けたとは考えられないという竹沢尚一郎の指摘は、十分妥当なものだ［竹沢 2017 260］。方法論的にマリノフスキーの影響を重く見る指摘［川田 1985］もあるが、やはりそれはごくごく限定的だったとみたほうがよかろう。

有賀喜左衛門は後年、自身が最も影響を受けたのはマリノフスキーだと回顧している。特にそのインテンシィブな調査手法に対しては、これほど強いものはないと高く評価する。それに対してフレーザーについては膨大な資料を扱うだけで、それでは深い学問とはならないと批判的だ［有賀 2000 21］。ここでは触れられてはいないが、その批判は暗に柳田をも指していることだろう。有賀は『民族』終刊後、昭和一四（一九三九）年に『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』という分厚いモノグラフを上梓している。それはマリノフスキー以上のモノグラフを書きたい、という強い思いに裏打ちされた作品だ［有賀 2000 22］。柳田がマリノフスキーの方法論的意義を十分、咀嚼していたらその「比較」という手法はおそらく破棄されていたに違いない。だが、そうはならなかった。柳田は当時、自身の老いを強く意識していたことはすでに述べた通りだ。その老いもまた、新たな方法論の受容を阻んだ、のかもしれない。

柳田が『民族』の編集から手を引き、その後雑誌自体が終刊となって程ない昭和四（一九二九）年、新たに民俗学会が設立され、機関誌として雑誌『民俗学』が創刊。これは事実上、『民族』の後継誌であった。旧『民族』の関係者のほとんどすべてが新たな学会へ結集した一方で、柳田は一人参加を拒み、孤立する［永池 1988 769］。自らの学問を継承してくれるはずの若手育成への期待は、結果として実ることなく終わったのだ。『民族』を編集するにあたって呼び寄せた岡正雄、田辺寿利や石田幹之助、有賀喜左衛門らは、その後、柳田が昭和に入って創刊した雑誌『民間伝承』にまったく寄稿していない。宇野円空や赤松智城もまた、しかり。

『郷土研究』刊行時、学歴を横断した知の集合体を模索した柳田は、『民族』でも『郷土研究』同様、各地の報告者から資料を求める一方、他方で東京帝大卒の若手を結集してアカデミズムとも結びついた新たな学知を形にしようとした。だが、結局ここでも柳田は挫折を余儀なくさ

せられた、といわなければなるまい。

とはいえ、考えてみたいことがある。柳田の『民族』での模索が仮にうまくいったとしよう。「折角沢山のよい報告が出て居るのに、本誌の研究はどれも是も、横ぞつぱうを向いて自分の卓見のみを独語して居られるのは不本意である」という現実に対して、各地方からの報告資料を活用したアカデミックな論文が何本も誌面前半を飾ったとしたら、どうだったのか。それはまさに地方と中央との分業体制に他なるまい。あくまでも資料を提供するだけの地方と、その成果だけを収奪し利用する中央という構造がそこにできあがってしまうことになる。それは果たして妥当なことなのか。柳田の挫折はこうした問いをも、改めて突き付けてくる。

## ７．最後に

柳田国男は大正一〇（一九二一）年、国際連盟の委任統治委員会委員としてジュネーブに向かう。当時四〇代後半に差し掛かっていた柳田は、自らの老いを自覚するのと同時に、新たな学問への思いを募らせていく。初の渡欧体験の中で自由な時間を取りやすかった柳田は、各国の博物館や美術館に足を運ぶのと同時に、時として大学の講義を聴講し、多数の洋書を入手し、当時の最先端の民族学や言語地理学の成果を得る。柳田にとってそれは留学体験同様の意義を持ったのである。

委任統治委員として日本の管轄下にあったのが太平洋諸島だったこともあり、その住民の福祉と発展を考えざるを得なくなった柳田にとって民族学はその実現を可能とさせる学問として受け止められた。そうした人々は島に暮らすという点で日本の事情と重なっており、信仰にも共通点が見出せる。沖縄などの南島への柳田の関心は、さらに太平洋の島々にまで及ぶことになる。

ジュネーブから帰国した柳田は、自らの学問上の継承者を育成するべく、「青年」を対象として様々な働きかけをしていく。手始めとした青年団機関誌『青年』での呼びかけがうまくいかなかった柳田が次に考えたのが、アカデミズムへの接近だった。第一次大戦後の協調主義に呼応して一国史、政治史に止まらない新しい歴史学、すなわち文化史が台頭した時代であり、柳田が目指す学知もその一環として受け止められやすかったという事情、さらに大学令によって高等教育の裾野が広がったという背景もあった。

柳田が新たに取り組んだのが雑誌『民族』の刊行だった。編集には岡正雄他、東京帝大卒の若手をあてる。次代の学問の担い手としての期待からである。同時に若手にとって柳田は滞欧時、最先端の学知にふれ数多くの洋書を蔵したという点で、新たな時代にふさわしい求心的存在だったのだ。また、民族学が学問の中心としての役割を大きく期待されたのが、この時期であった。

誌面は前半、主にアカデミズムに拠点がある研究者による論考、後半は全国各地からの資料報告という構成をとった。前者が海外の理論や文献の紹介、太平洋の島々を扱った論考等、アカデミックで多彩な内容であった半面、資料報告中心の雑誌後半とは接点がほとんどなかったのも確かである。柳田はその点に大きな不満を抱いた挙句、雑誌の編集から降りてしまう。

若手の気鋭の研究者を巻き込み、文化史の台頭とともに民族学にも目配りをしながら新たな学知を模索していた『民族』前後の柳田の営みには、大きな展望が開けていたはずだ。だが、実際に柳田がそこに寄せた論考は、『郷土研究』時と大差ないものとなった。さらに『民族』誌上に紹介されたデュルケームの理論他、海外の動向を柳田は受容することなく終わったことも

あって現在、『民族』がはらんでいた可能性には目が行き届きにくい。さらに昭和に入って一気に覇権を握ったマルクス主義歴史学の登場が追い打ちをかける。

その旗手、羽仁五郎が昭和三（一九二八）年、『史学雑誌』に掲載した「反歴史主義批判」は象徴的だ。「考古学的また社会学的または原始土俗学的の側からの歴史領域拡充」の主張は正しかった、しかしそうした文化史的方法の成功は外見上のものに過ぎず、いずれも浅薄を免れないか、あるいはそれらを総合できぬまま終わりかねない、と羽仁は一刀両断する［羽仁 1928 2・7］。この論文を巻頭に置き、翌年刊行された羽仁の『転形期の歴史学』は「マルクス主義歴史学のマニフェスト」［磯前 2008 16］となる。文化史は一気に後景に追いやられ、歴史学の光景は一変する。すべての学の基盤としての民族学、という見方も力を失う。

第一次大戦後の国際協調と民族自決のうねりは、大正後期の柳田の学問的営為にも刻印されている。委任統治領となった太平洋諸島の人々の福祉と発展を国際連盟の一員として願い、そのための学知として民族学に大きな期待を寄せた柳田。また多様な分野を横断する文化史と歩調を合わせたかのような、『民族』の誌面。だが、そうした「戦後」はやがて終焉せざるを得なくなる。国際協調路線の幣原外交が終わりをつげ、昭和二（一九二七）年には第一次山東出兵が強行される。また歴史学の世界でも、マルクス主義歴史学が大きく台頭。柳田の学問は変容を迫られていく。

冒頭で参照した岡村民夫の言葉を、最後にここでも繰り返しておこう。「柳田の社会活動と学問形成は、第一次世界大戦後の新世界秩序の中で演じられた、民族自決主義をめぐる無数の思想的ドラマの一ケース」［岡村 2013 355］だったのだ、と。そう、大正後期から昭和初期の柳田の営みには、第一次大戦後という時代状況がまざまざと刻まれている。それは当時の柳田が時代に真正面から真摯に向き合ったことを意味する。その曲折に満ちた可能性と限界の軌跡にこそ、私たちは目をこらさなければなるまい。

**参考文献**

天野郁夫　2009　『大学の誕生（下）』中央公論新社

有馬学　2013　『「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社

有賀喜左衛門　1969　「『民族』の頃」『定本柳田國男集月報 13』筑摩書房

有賀喜左衛門　2000　「有賀喜左衛門先生最後の講話」北川隆吉編『有賀喜左衛門研究－社会学の思想・理論・方法』東信堂

池田弥三郎　1981　『孤影の人　折口信夫と釈迢空のあいだ』旺文社

石田幹之助　1986　「柳田先生追憶」『石田幹之助著作集第四巻』六興出版

石田幹之助、岡正雄他　1945　「民族学の問題－日本に於ける歴史と課題－座談会」『民族研究彙報』3 巻 1・2 号

磯前順一　2008　「序論　戦後歴史学の起源とその忘却－歴史のポイエーシスをめぐって－」磯前他編『マルクス主義という経験』青木書店

伊藤彰浩 1999　『戦間期日本の高等教育』玉川大学出版部

伊藤幹治 1998　「柳田国男と J・g・フレーザーの『金枝篇』（訳書）」『民俗学研究所紀要』第二十二集別冊

伊藤幹治 2002 『柳田国男と文化ナショナリズム』岩波書店
伊馬春部 1969 「先生の先生」『定本柳田國男集月報 10』筑摩書房
岩本通弥 2018 「珍奇なるものから平凡なものへ －柳田國男における民俗学と民族学の位相」『超域文化科学紀要』23
移川子之蔵 1986 「海南小記を読みて」後藤総一郎編『柳田国男研究資料集成 第 1 巻』日本図書センター
宇野円空 1941 『マライシヤに於ける稲米儀礼』財団法人東洋文庫
海野芳郎 1972 『国際連盟と日本』原書房
太田次男 1982 「松本芳夫先生を悼む」『斯道文庫論集』№.19
大塚英志 2014 『社会をつくれなかったこの国がそれでもソーシャルであるための柳田國男入門』株式会社 KADOKAWA
大藤時彦 1990 『日本民俗学史話』三一書房
岡正雄 1958 「二十五年の後に」石田英一郎、岡正雄他『日本民族の起源』平凡社
岡正雄 1979a 「岡正雄年譜」『異人その他 日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』言叢社同人
岡正雄 1979b 「民族学との出会い 聞き手井上幸治」『異人その他 日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』言叢社同人
岡正雄 1979c 「柳田国男との出会い」『異人その他 日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』言叢社同人
岡谷公二 1985 『貴族院書記官長 柳田国男』筑摩書房
岡村民夫 2013 『柳田国男のスイス 渡欧体験と一国民俗学』森話社
小田富英 2019 「柳田国男年譜」『柳田國男全集 別巻一』筑摩書房
掛谷舜治 1996 「日本青年館と柳田国男」柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房
加藤哲郎 2008 『ワイマール期ベルリンの日本人 洋行知識人の反帝ネットワーク』岩波書店
川田稔 1985 『柳田国男の思想史的研究』未来社
菊地曉 2007 「赤松智城論ノオトー徳応寺所蔵資料を中心にー」『人文学報』第 94 号
熊谷辰次郎 1924 「民衆娯楽研究会」『青年』九月号
慶応義塾 1962 『慶応義塾百年史 別巻（大学編）』慶應義塾
昆野伸幸 2019 『増補改訂近代日本の国体論 〈皇国史観〉再考』ぺりかん社
坂野徹 2005 『帝国日本と人類学者 一八八四－一九五二年』勁草書房
佐藤健二 2000 「解題（誌上談話会）」『柳田國男全集 第二十六巻』筑摩書房
佐谷眞木人 2015 『民俗学・台湾・国際連盟 柳田國男と新渡戸稲造』講談社
篠原初枝 2010 『国際連盟 世界平和への夢と挫折』中央公論新社
清水昭俊 2013 「異人、現在学的民族学、そして種族史的形成－岡正雄と日本民族学の展開」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の戦前と戦後 岡正雄と日本民族学の草分け』東京堂出版
高橋治 2000 「柳田国男の洋書体験一九〇〇－一九三〇 柳田国男所蔵洋書調査報告」柳田国男研究会編『柳田国男・民俗の記述』岩田書院

高見寛孝　2010　『柳田國男と成城・沖縄・國學院』塙書房
竹内洋 2011 『学歴貴族の栄光と挫折』講談社
竹沢尚一郎　2017　「ロマンティストであり、リベラリストであるー「柳田国男」の自己創造」『国立民族学博物館研究報告』42-2
土田杏村　1928　「『民族』を読みつつ」『民族』第四巻第一号
鶴見太郎 2019 『柳田国男ー感じたるまゝ』ミネルヴァ書房
ドウス、ピーター　「植民地なき敵国主義ー「大東亜共栄圏」の構想ー」『思想』814
永池健二　1988　「雑誌『民族』とその時代」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房
中西三郎　1971　「柳田國男先生の思い出」『定本柳田國男集月報 32』筑摩書房
西村眞次　1924 『文化人類学』早稲田大学出版部
橋本満　1992 「民族ー日本近代を統合する力」戦時下日本社会研究会編『戦時下の日本』行路社
長谷川邦男　1996 「柳田国男とイギリス民俗学の系譜 I　柳田国男の読書と蔵書･予備調査」柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房
羽仁五郎　1928　「反歴史主義批判」『史学雑誌』第三十九編第六号
林淳　2005　「文化史と民俗学」『柳田国男研究論集』第 4 号
日夏耿之介　1986　「『海南小記』ー柳田国男氏の近業ー」後藤総一郎編『柳田国男研究資料集成　第 1 巻』日本図書センター
堀三千　1970　「思い出すことなど」『定本柳田國男集月報 25』筑摩書房
丸山泰明 2020 「総論ー青年と民俗学の時代ー」『昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究』神奈川大学日本常民文化研究所
水島治夫　1961　『府県別生命表』財団法人生命保険文化研究所
室井康成　2010　『柳田国男の民俗学構想』森話社
柳田国男　1971a　「佐々木喜善氏宛」『定本柳田國男集　別巻第四』筑摩書房
柳田国男　1971b　「胡桃沢勘内氏宛」『定本柳田國男集　別巻第四』筑摩書房
柳田国男　1983　「委任統治領における原住民の福祉と発展」岩本由輝訳、岩本由輝『もう一つの遠野物語』刀水書房
柳田国男　1997a　『故郷七十年』『柳田國男全集 第二十一巻』筑摩書房
柳田国男　1997b　「郷土誌編纂者の用意」『柳田國男全集 第三巻』筑摩書房
柳田国男　1998　『青年と学問』『柳田國男全集 第四巻』筑摩書房
柳田国男　1999a　「島々の話　その四」『柳田國男全集 第十九巻』筑摩書房
柳田国男　1999b　「民俗学の三十年ー記念講演会の晩の挨拶」『柳田國男全集 第二十巻』筑摩書房
柳田国男　1999c　『婚姻の話』『柳田國男全集 第十七巻』筑摩書房
柳田国男　2000a　「国際連盟の発達」『柳田國男全集 第二十六巻』筑摩書房
柳田国男　2000b　「太平洋民族の将来」『柳田國男全集 第二十六巻』筑摩書房
柳田国男　2000c　「国際労働問題の一面」『柳田國男全集 第二十六巻』筑摩書房
柳田国男　2000d　「誌上談話会」『柳田國男全集 第二十六巻』筑摩書房
柳田国男　2000e　「編輯者の一人より」『柳田國男全集 第二十六巻』筑摩書房
柳田国男　2001a　「編輯者より」『柳田國男全集 第二十七巻』筑摩書房

柳田国男　2001b　「編輯者より」『柳田國男全集 第二十七巻』筑摩書房
柳田国男　2001c　「編輯者の一人より」『柳田國男全集 第二十七巻』筑摩書房
柳田国男　2004 「ジュネーブの思ひ出　初期の委任統治委員会」『柳田國男全集 第三十一巻』筑摩書房
柳田国男　2014　「瑞西日記」『柳田國男全集 第三十四巻』筑摩書房
柳田為正　1996　『父　柳田國男を想う』筑摩書房
矢野敬一　2023　「柳田国男の「野の学問」　新渡戸稲造・郷土会・雑誌『郷土研究』」『静岡大学教育学部研究報告　人文・社会・自然科学篇』74
山口輝臣　2005　「大正時代の「新しい歴史学」　日本文化史という企て、和辻哲郎と竹岡勝也を中心に」『季刊日本思想史』№67
山室信一　2011　『複合戦争と総力戦の断層　日本にとっての第一次世界大戦』人文書院
若井敏明　2006　『平泉澄　み国のために我つくさなむ』ミネルヴァ書房
渡勇輝 2023 「柳田国男と黎明期の神道研究－神道談話会を通して」『アジア遊学 281 神道の近代 アクチュアリティを問う』勉誠社

なお『青年』の閲覧にあたっては、一般財団法人日本青年館および同館資料センター担当の坂野直子様にご高配賜った。改めて御礼申し上げる次第である。